

トップページ

メッセージ

日記

ミュージック

おすすめレビュー

お気に入り

足あと

プロフィール

設

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全体に公開

2006年07月31 滴水洞 001 ◆63年哲学論文という先駆！

日
00:26

40周年になる文化大革命の歴史的総括を何回かに分けて考えてみたい。

< 7月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

最近の日記

- ▶ [滴水洞 023 ◆中国革命の原点、](#)
- ▶ [百度 \(Baidu\)、来年から日本語](#)
- ▶ [滴水洞 022 ◆暴力論7 暴力は絶](#)
- ▶ [滴水洞 番外02 ◆江尻健二さんの](#)
- ▶ [滴水洞 021 ◆墨家と毛沢東思想](#)
- ▶ [北京からの報告 \(2\)](#)
- ▶ [北京からの報告 \(1\)](#)

◆ もっと読む

最近のコメント

- ▶ [一覧を見る](#)

今年の日記

- ▶ [2006年12月の一覧](#)
- ▶ [2006年11月の一覧](#)
- ▶ [2006年10月の一覧](#)
- ▶ [2006年9月の一覧](#)
- ▶ [2006年8月の一覧](#)
- ▶ [2006年7月の一覧](#)
- ▶ [2006年6月の一覧](#)
- ▶ [2006年5月の一覧](#)
- ▶ [2006年4月の一覧](#)
- ▶ [2006年3月の一覧](#)
- ▶ [2006年2月の一覧](#)
- ▶ [2006年1月の一覧](#)

総括の前提的立場として、今井恭平氏の「文革を失われた10年と描き、たんなるカオス、極左的妄動と描き、三角帽子を被せられたインテリの悲劇と描き出すことで満足することが、文革から何かを学ぶこと、何かの教訓を得ることになるのだろうか？それはむしろ単なるお粗末な精算主義であり、怠惰な忘却にすぎない」ももちろん新聞2006.7.18付 <http://blogst.jp/momo-journal/daily/200607/18> という指摘に同意する。

まず、第1回は文化大革命の哲学。毛沢東の哲学論文「人間の正しい思想はどこからくるのか」1963年5月 <http://www.linelabo.com/maotsetu.htm> は重要だと私は考える。文化大革命を準備した核心のひとつがここにあるからである。何が画期的で何が新しいのか。つまり、何が文化大革命を準備したといえるのか。

論文は「人間の正しい思想は……ただ社会の生産闘争、階級闘争、科学実験という三つの実践のなかからのみ生まれてくるのである」と指摘している。生産闘争とは何か。人間の自然に対する変革の闘いであり、自然改造である。階級闘争とは何か。新しい階級の旧い階級に対する変革の闘いであり、社会改造である。科学実験とは何か。これには注釈が必要である。訳語が不適切だからだ。この論文で続けて「認識過程の第二の段階」と書かれている内容の、あらゆる分野、つまり、自然改造や社会改造も含めたあらゆる分野での「実験」であり、「実験」をつうじた、新しい思想の旧い思想に対する変革の闘いのことである。つまり、人間の思想変革、思想改造のことなのである。

毛沢東は、自然改造、社会改造、思想改造を「三つの社会的実践」という、このどこが新しいというのか。日本の左翼は学術的(ペダンチック)な言葉を散りばめた「××論」をありがたがっているうちに、思想と哲学の威力を理解できない輩が少なくない。情けないことである。

閑話休題。自然改造、社会改造、思想改造が「三つの社会的実践」というのはどういうことか。自然改造は資本主義でも「できる」。資本の利潤追求のために「列島改造」をやる。しかし、自然改造をやり遂げることはできない。「公害」など矛盾が噴き出ている。これを解決し、真に自然改造をやり遂げるためには社会改造が必要である。利潤追求のための階級を抑え込み、私心なき階級が社会をリードする必要がある。こうして政治制度を改めることは修正主義でも「できる」。しかし、社会改造をやり遂げることはできない。階級として私心なき階級といっても、それはあるがままの階級としては存在しないからである。旧い思想、文化、風俗、習慣は、政治制度が改まったからといってすぐには改まるものではない。思想改造が必要なのである。

ゆえに「三つの社会的実践」をさいごまでやり遂げる階級は、帝国主義に反対し、修正主義に反対する力、すなわち反帝反修の力を持った階級なのである。毛沢東が文化大革命の始まる3年前に書いた哲学論文「人間の正しい思想はどこからくるのか」はまた、文化大革命を準備する哲学的宣言でもあった、私はそう考えている。

編集

コメント

[コメントを書く](#)

紅衛兵

今年3月、台北で文化大革命をふりかえる座談会があり(『批判と創造』誌主催)、機縁があって出席した私も話しました。以下がそのもよう。

2006年08月07日
09:53



●「文革」发动四十周年的回顾与反思座谈会

http://www.china-shaoshan.com/bbs/showtopic.asp?TOPIC_ID=8522&Forum_ID=1

●「文革」发动四十周年的回顾与反思座谈会

http://www.maostudy.org/rmcq_ldarticle.php3?article=2006-06/WG40_tw.txt

●「文革」发动四十周年的回顾与反思座谈会

<http://blog.xuite.net/g1.p2/critique1/6391633>

削除

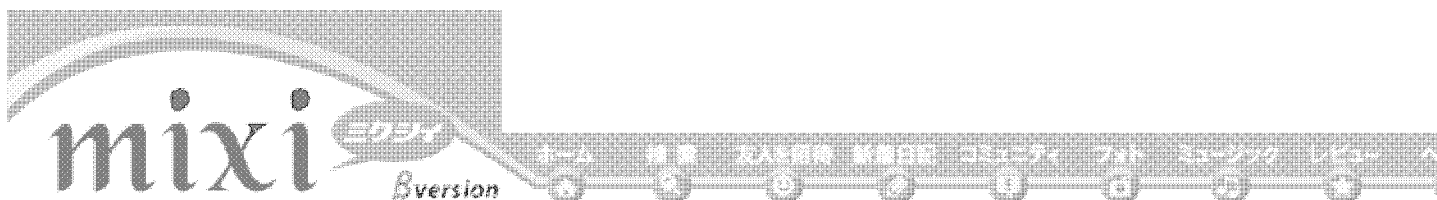
コメントを書く

COMMENT

確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年08月01 滴水洞 002◆李振盛の総括と「やられる前にやれ」

日
00:58

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

7月22日22:10-23:00、NHK衛星第1でBSドキュメント「文化大革命 40年目の証言」http://www.nhk.or.jp/omoban/k/0722_13.html が放映された。文化大革命のもようを10万枚の写真に記録した中国人写真家・李振盛と40年目の今をたどる番組である。

そのなかに、1966年9月、ハルビンで行われた黒龍江省の省長・李範五とその妻への批判大会で、紅衛兵たちがバリカンで強制的に髪を刈る写真がある。李振盛は、40年後に現地を訪れ、省長と共に批判された部下や省長の娘に会う。さらに写真の紅衛兵たちがハルビン軍事工程学院(現ハルビン工程大学)の六五兵団の者だと突き止める。卒業生の証言によると「彼らは高級幹部の子弟たちで、その後ろ盾があった。そうでなければ庶民では省長には歯向かえない。複雑な事情があり、親が打倒されそうになっており、いかに自分自身が革命的かをアピールしようとした」のだという。

いかに自分自身が革命的かをアピールするために、徹底的に批判する。エスカレートして、血が滲むほどバリカンで髪を引きちぎる。残虐である。「政治は人びとを崇高にもするが醜悪にもする」とは、沖縄で焼身自決した船本洲治烈士のことばであるが、まことに醜悪である。40年間ずっと日本文化大革命の息子を自認してきている私としては、できれば見たくない写真である。

やらなければやられる———という心理なのだろうか。思い当たったことがある。70年代、山谷・釜ヶ崎の流動的下層労働者(労務者)の運動のなかで、「やられる前にやれ！」というスローガンが提唱されたことがあった。その前の「やられたらやりかえせ！」というスローガンには消極的に賛成した私だったが、「やられる前にやれ！」には当時も賛成できず、当時私は文書を出して反対の意思表示をした。

いま考え直しても、「やられる前にやれ！」には中間階級のあせりが反映している、のではないか。いま／現在は、やられて(差別され、抑圧されて)いないのだろうか。いまはやられていないけれど、じっとしていたらすぐにでもやられてしまう、というのは、どこのどういう人びとの傾向なのだろうか。

かてて加えて、自分自身はいかに革命的かをアピールする、という心理。これの日本版としては、差別の被害の量が大いことを自慢する、差別の被害の量の大いことをもって、イコール、自身が革命的であるとして、相手の言動を「抑圧」しようという傾向。「差別されてないお前にはわからない」という恫喝の前に、たいていの者は沈黙させられてしまう。

これについては、当時私は、「ひどいわ、ひどいわ主義」批判として、数年にわたって、闘争—批判をやろうとした。

●「団結の哲学をうちたてよう「ひどいわ、ひどいわ」主義に反対する」

<http://www.linelabo.com/hidoiwa.htm>

●「団結の哲学をうちたてよう 続・「ひどいわ、ひどいわ」主義に反対する」

<http://www.linelabo.com/hidoiwa2.htm>

40年をへた現在も、中国における「出身階級決定論」と通じるものとして日本の「ひどいわ、ひどいわ主義」は、依然として、闘争—批判—改革の対象である。

編集



コメント

[コメントを書く](#)[音治郎](#)

2006年08月02

日

14:02



《「ひどいわ、ひどいわ」主義に反対する》
読ませてもらいました。
いい論文ですね。

*

近々論議になる訪問者がありそうなので
再学習しておきます！

[紅衛兵](#)

2006年08月02

日

15:36



音治郎さん、コメントありがとうございます。

003にも書きましたが、左翼運動、反権力運動の内部だけでなく、いまでは社会的現象として広がっている、と捉えることもできると私は考えています。

《翻身》というのはどういうことかということを深める必要があると、併せて考えています。

[紅衛兵](#)

【関連リンク】

李振盛在美国发表文革摄影集

2006年08月06

日

23:41



<http://www.voanews.com/chinese/archive/2006-05/w2006-05-12-voa60.cfm>

请收看方正纽约报道

http://www.voanews.com/mediaassets/chinese/2006_05/Video/wmv/lizhengsheng_051306.wmv

中国文革四十周年

http://www.voanews.com/chinese/Cultural_Revolution_40_Years.cfm

2006年08月07

日

00:03

[紅衛兵](#)

文革四十周年综合报道

<http://www.rfa.org/mandarin/shenrubao/2006/05/15/wenge2/>

削除



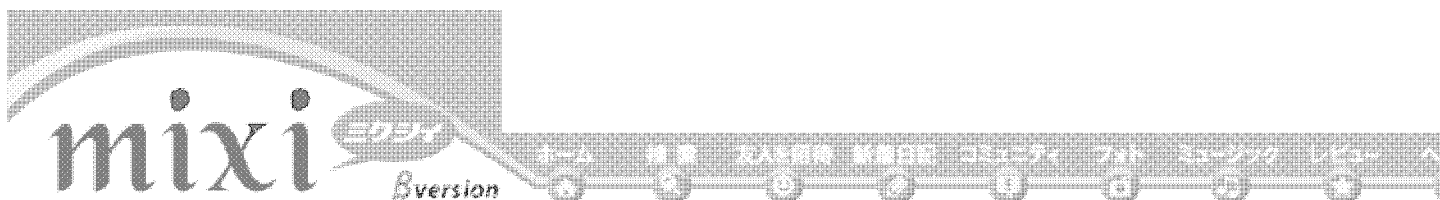
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設定](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年08月02日 滴水洞 003◆むほんの権原はどこにあるのか

13:36

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

前回紹介したBSドキュメントでは、黒龍江省省長に対する批判内容として髪型が毛主席に似ているのは政治的野心の表れ(!)というものとともに私生活や道徳に批判が及んだという。私は連合赤軍のリンチ事件を想起した。少なくとも人たちも想起しただろう。しかし私が想起したのは、肯定的に!である。全共闘運動が提起したのは、思想というものはその人が何を言ったか(書いた文章)にではなく、その人が何をやったか(行動、生活)にあるということだったからだ。

個々の「暴力」については具体的な事実にもとづく分析が必要だろう。しかし文化大革命に批判的な側からしても、批闘大会で糾弾された者とは「彼らの本当の犯罪は、権力や知識、富をもっていることだった」[李振盛『紅色新聞兵』p.73]のである。

今後、もっともっと文化大革命のさまざまな事実が明るみに出るだろう。しかし、社会を牛耳るのが「権力や知識、富をもっている」階級でありつづけ、そのなかで個々の文章を書く者はたいていは「権力や知識、富をもっている」者であるから、文化大革命を非難し、糾弾する文書のほうが圧倒的であろうことは驚くに値しない。

文化大革命の何が、中国の、そして日本を含む世界の若者を熱狂させたのか。そこに何があったのか。その人が何をやったのかにおいて思想を批判すること、これは間違っていない。「権力や知識、富をもっている」者を批判すること、これも間違っていない。それまで永年、「権力や知識、富をもっていない」者は、持たざる者であるがゆえに、ただただ沈黙を強いられてきたのだから。

この正しさは、大いなる行き過ぎを伴って歴史を確かに動かした。だからこそ、現代日本社会にもその「後遺症」が見られるのではない。「被害者の声」絶対主義である。通り魔から交通事故まで、さらに「拉致」事件まで、被害者はあたかも絶対正義であるかのようにふるまう。犯人を吊るせ!即刻死刑にしろ!この痛みがお前らにわかるか!と、全国各地でふきあれている。容疑者とされた人の担当弁護士までが「人非人」呼ばわりされる異常事態である、と私は感じている。

だが、この傾向は批判するには覚悟が要る。相手が「被害」当事者であることを声高に主張すればするほど、聞く側は黙らざるをえないからだ。「被害」に耳を傾けよ、ということは全共闘が主張し、紅衛兵が訴えたことでもあったからだ。だが、異論を封じておいて権力をかさに主張される現状には、私はどうしても異議あり!と言わずにはおれない。被害者は加害者に事実究明と謝罪、原状回復を求める権利がある。「復讐」する権利がある。しかし、なぜ国家という権力に代理復讐としての「死刑」を求めるのか。

文化大革命で「権力や知識、富をもっている」者を批判したことは間違っていないからだ。BSドキュメントで「紅衛兵たちは高級幹部の子弟で、後ろ盾があったから造反できた、そうでなければ庶民では省長に歯向かえない」という証言があったが、ここに残された課題があったのではない。こんどこそ、庶民の本物のむほんを!

編集

コメント

[コメントを書く](#)

紅衛兵

むほんには成功したものも失敗したものもあるが、本ものにもせものもある。むほんが本ものかどうかの規準はどこにあるかといえば、価値観の闘いがあるかどうか、ではなからうか。

2006年08月07

日

10:06



私が水戸黄門を大嫌いなのは挙げてこの理由である。印籠の前に直前まで敵対していたかにみえた双方がみな揃って頭をたれてしまう。たまに歯向かうことをやめない者もいるが、光圈を騙るにせものだ、として歯向かうわけで、本ものの光圈、本ものの印籠の威光を認めることでは同じである。表面上の「対立」は本当の対立をおおいかくす茶番でしかない。「悪を懲らしめる」といっても、平和的移行であり、何ら社会が変わるわけではない(これに対して「必殺～」シリーズは少なくとも生か死か、対立は非和解的であり、相手の抹殺によって「悪を懲らしめる」わけであるから、少なくとも対立の隠蔽も平和的移行の宣伝もないから、よい)。

削除

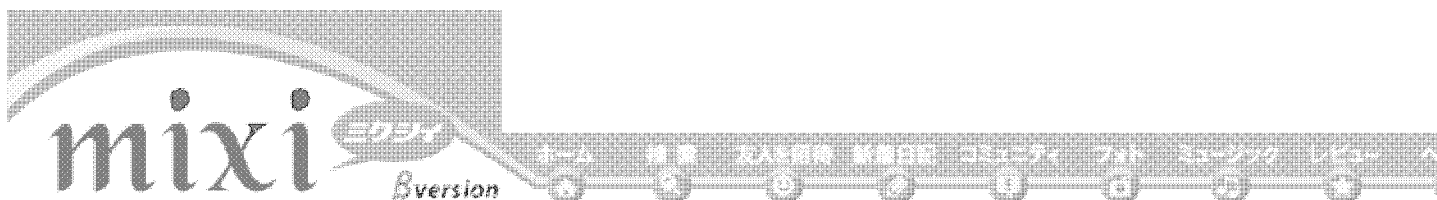
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年08月05 滴水洞 004◆義侠や同情は変質してしまった？

日
02:12

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

文化大革命は「専門家」が「素人」をおさえつけ、「都市」が「農村」を支配する社会の基本原則に対する造反—むほんだった。これが主要で、基本的な性格であった。繰り返すがこれは正しい。

「専門家」に対する「素人」の、「幹部」に対する「ヒラ」の、「富と知識を持つ者」に対する「富と知識を持たざる者」の、むほんであり、叛乱、復讐であった。永年にわたって積もりに積もった想い、叫びに似た沈黙は、あまりに巨大であったから、噴き出したとたん、それは爆発し、行き過ぎを伴った。差別され抑圧された人びとのむほん、叛乱、復讐は世界中に瞬間に波及した。むほんの権利の根拠として、中国では貧農や革命幹部などの出身という血統主義が強調された。日本では、在日朝鮮人、在日中国人、沖縄・アイヌの人びと、身体障害者、「公害」被害者、女性が、その存在ゆえの権利と革命を主張した。出身階級も階級区分も何もかも混然とし、嵐のなかにあった。行き過ぎは、革命を反革命に転じ、反差別を逆差別に転じた。現在は、「専門家」「幹部」「富と知識を持つ者」による巻き返しの時期である。

魯迅の「剣を鍛える話」は示唆的である。父の仇を討ちに行く眉間尺(みけんじゃく)の物語である。途中で出会った黒い男は「その仇討ちはかなわぬこと」「おれがおまえのために仇を討ってやること」を告げる〔以下、竹内好訳『故事新編』岩波文庫pp.104-105、『魯迅文集』第二巻pp.277-278〕。

《あなたが？ わたしのために仇を討ってくださる？ 義侠のお方》

《いや、そのような呼び方はおれを辱めるものだ》

《ではあなたは、わたしたち孤児と寡婦に同情されて……》

《いや、子ども、そのようなけがらわしい呼び名を二度と口にしてはならぬ〔中略〕義侠、同情、それらのものは、昔はけがれない時もあったが、今ではすべて卑しむべき高利貸の資本に変わった。おれの心には、おまえの言うそれらのものは何もない。おれはおまえのために仇を討つ、それだけだ》

そう当時はもっとも革命的といわれた「紅五類」や「被差別人民」は再び抑えこまれ、嘲笑されるありさまであり、彼らのために社会運動、反権力運動をするなどということはカッコ悪いことになってしまった。日本では労働貴族が「弱者救済」の旗を掠め取り、「専門家」「優等生」の国家権力は、被差別部落や山谷・金ヶ崎、沖縄にジャブジャブと銭を流し込み、人びとの魂を腑抜けにさせていった。まさに「義侠、同情、それらのものは、昔はけがれない時もあったが、今ではすべて卑しむべき高利貸の資本に変わった」のだ。だからこそ、現在の、犯罪被害者による「犯人を吊るせ！」というヒステリックな運動は最も醜悪な、反革命なのである。

むほんの権利の根拠はどこにあるのか。魯迅は「剣を鍛える話」でこう提起している。

《でも、あなたはなぜ、わたしのために仇を討ってくださるのですか！ あなたは、父をご存じですか？》

《おれは前からおまえの父を知っておる。前からお前を知っておるのと同様にな。しかし、おれが仇を討つのは、そのためではない。賢い子どもよ、よいか、聞け！ おまえはまだ知らぬのか、おれがどんなに仇討ちの名人かを。おまえのは、おれのだ。それはまた、このおれだ。おれの魂には、それほど多くの傷がある。人が加えた傷と、自分が加えた傷とが。おれはすでに、おれ自身を憎んでおるのだ》

「おれの魂には、それほど多くの傷がある」というのはどういうことか。これこそ、カール・マルクスが『ヘーゲル法哲学批判』1844年で述べた「普遍的代表者と感ぜられ認められるような」「その階級の要求と権利とが真に社会そのものの権利と要求であるような」階級とぴったり符合する。「逆に社会の一切の欠陥が或る他の階級のなかに集中していなければならない、また或る特定の立場が一般的障害の立場、一般的障壁〔拘束〕の化身でなければならない、またさらに、或る特殊な社会的領域が、社会全体の周知の罪とみなされ、そのためこの領域からの解放が全般的な自己解放と思われるようになっていなければならない」〔城塚登訳岩波文庫pp.90-91〕

[編集](#)[コメント](#)[コメントを書く](#)**紅衛兵**

「剣を鍛える話」で仇討ちは成就する。成就するが眉間尺も黒い男も死ぬ。死んで仇を討つのである。

田川建三さんが名著『イエスという男』第二版（2004、初版1980）で、先駆イエスが殺されたのは「その反逆の精神を時代の支配者は殺す必要があったからだ」と指摘し、次のように書いている。

2006年08月07

日
10:18

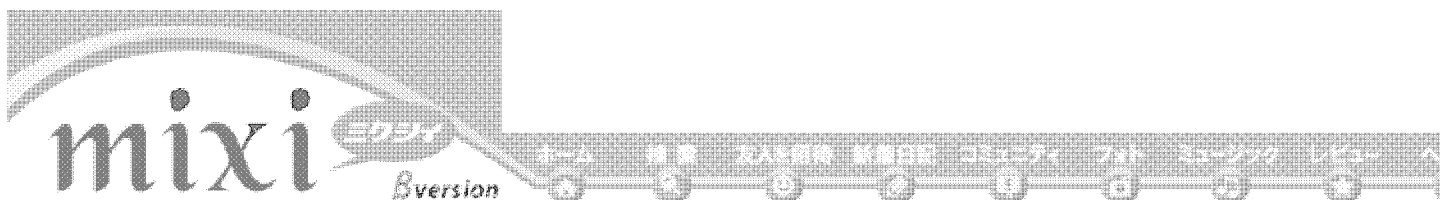
【……逆説的反抗に立ち上がれば、人は悲劇に突入する。しかし歴史を動かしてきたのはさまざまな悲劇だった。／イエスという人がさまざまな場面で語り、主張してきた逆説的反抗を「真理」の教訓に仕立て変えてはならない。イエスは「真理」を伝えるために世界に來た使者ではない。そのように反抗せざるをえないところに生きていたからそのように反抗した、ということなのだ。そして、もう一度言うが、だから殺されたのだ。】〔同書pp.75-76〕

毛沢東は今も殺され続けている。それは最期まで文化大革命を闘ったからである。だからこそ、毛沢東と文化大革命をいま、総括する必要がある。総括せざるをえない。せずにはおれない。

[削除](#)[コメントを書く](#)[確認画面](#)

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設定](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年08月10 滴水洞 005◆暴力論1 ファノンの提起、ルネ・ジラルルの問い

日
21:45

加々美光行さんが『資料中国文化大革命 出身血統主義をめぐる論争』(りくえつ、1980年)の「あとがき」で、

【「没主体」的な「知」に対する批判は堅持しつつ、「没主体」的な情念に対して無反省な形で六〇年代に突入してきた中国の状況は、ちょうど同じ時期、日本が「没主体」的な情念に対しては批判意識を持ちつつ、高度経済成長初期の「没主体」的な科学的「知」に対しては無反省な状況にあったのと、全く同じメダルの表と裏のような酷似した状況にあったのではないかと……しかしながら一九七〇年代に入ると……中国における「没主体」的な科学的「知識」に対する批判の後退、日本における「没主体」的な情念に対する批判の後退は、むしろ相対的に他の批判側面を弱めてきているとみなすこともできるだろう。】

と指摘し(私はなるほどと同意する！)、さらに次のように続けていることは、いまでも宿題のままになっている大切な問題であると私はかんがえている。

【では六〇年代末と七〇年代のこうした世界史的同時性は一体どこから発しているのか、と問うならば、明らかにベトナム戦争の激化と終息が大きな影響を与えてきたといわざるをえない。ベトナム戦争には「没主体」的な近代科学、「没主体」的な情念、そして「主体性」の立場といったここで論じたすべてのことが含まれていたのではなかったか？……

ただ明確にいえることは六〇年代末に日本、中国をはじめ世界の到るところで提起された諸問題はおおむね「主体性」の立場から発せられた問いであったが、これらの問いにはほとんど何の回答も出されないまま一九八〇年の今日に至っているということである。このように問題にふたがされてしまったのは「主体性」の立場が暴力に対する深い洞察を欠いたまま闘争を武装化していったことと無縁ではないように思われる。

中国における武闘、日本における一部の新左翼の極端な武力闘争への傾斜、アメリカにおけるブラック・パンサーの登場など、運動の中期以後に現われた現象は何を意味するのか？

本資料集のあとに続いて出されるべき資料集は、それゆえこの暴力の問題を解明する課題を担うものでなければならないとわたくしは考えている。

アルジェリアにおいてフランツ・ファノンが「地に呪われた者」達の復権のために、暴力を肯定した時、それは主体性(ファノンの言葉では本質性)の回復のためであった。

「没主体」的な科学と、「没主体」的な情念とが席捲することになると思われる一九八〇年代にわたくしはこのファノンの問いに改めて反問しなければならないと考えている。】同書pp.281-283

これは、六〇年代末の「革命的暴力」の、明らかな「積極的共犯者」であった私の宿題だ——そのような問題意識をもちはじめから数年にならうか。昨年夏、文富軾さんの『失われた記憶を求めて 狂気の時代を考える』(板垣竜太訳、現代企画室、2005年)に出会った。1982年の釜山アメリカ文化院放火事件の「首謀者」として逮捕、投獄された著者による、運動と暴力をめぐる自省の書である。

そのなかで、文さんはルネ・ジラルルの「欲望は暴力を生み、暴力は宗教を生む」という指摘をひいて、次のように書いているが、私はその箇所に線を引いてからいまで、ずっと気になっている。

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

【……この章の私の話は、彼が生前に投げかけた次のような問いから準備される。「暴力はどこまで合理化されるのだろうか」。私はこの問いが暴力を行なった権力に対しても、どんなかたちであれその暴力に連累している私たち自身にも、同時に投げかけられていると思う。】同書p.77

[編集](#) コメント[コメントを書く](#)

2006年08月11

日

06:35

[森](#)

そも「問題」を「もんだい」と平假名に開くのは吉本隆明流だった筈ですが、前田さんまでが自立派の流儀に服してゐたとは存じませなんだ。あんな表記法は無意義な拘はりにしか思へぬのですが、それとも、これは洒落か何かなのでせうか。

[紅衛兵](#)

2006年08月11

日

09:11



森さん、コメントありがとう。

吉本さんの本は68-69年当時はよく読みました。最近はずんずん（初期のものどちがって面白くないからです）。でも、言われてみると上記の文章のなかでも、かんがえる（考える）、とか、おもう（思う）、とかは自分の「習慣」のなかに染み付いているかもしれませんね。

2006年08月11

日

09:16

[紅衛兵](#)

追記 「暴力のもんだい」からタイトルを変更（なお001-004もあとから付けたものです）。

[森](#)

2006年08月11

日

16:58



「かんがえる」その他、訓読みする語は假名書きといふ表記方針なら梅棹忠夫や高島俊男も採用してゐ、賛成しないが理解はできますが、格別難しくもない漢語を假名にした吉本流は不可解で、氣になってゐました。昔、吉本隆明が角川文庫版で解りやすく改稿したと書いてゐるので初めの方だけちょっと舊版と校合してみたら、漢字を假名表記にただけで悪文はその儘なのに呆れて投げ出したことがあります。爾來、吉本氏の文章センスに信用が置けぬ次第で。

本筋から逸れた話で、どうもすみませんでした。

2006年08月11

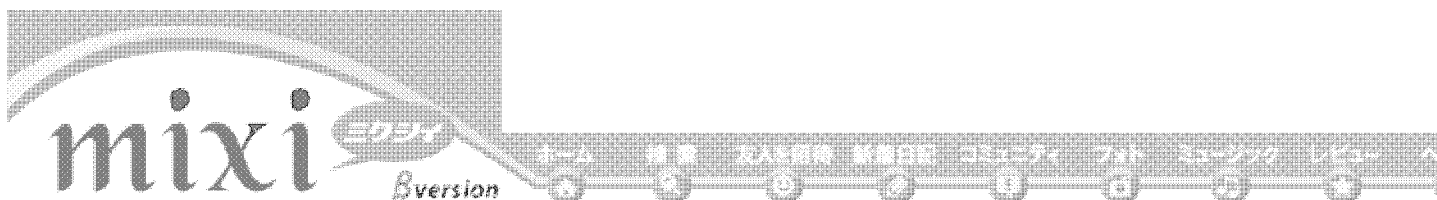
日

20:21

[紅衛兵](#)

わはは、御尤も（←これはヒラクべきでしたか）。

[削除](#) コメントを書く[確認画面](#)

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年08月16 滴水洞 006◆暴力論2 羽田の先駆としての善隣闘争の意義

日
13:47

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

日本の新左翼運動は1967年の佐藤訪ベト反対羽田闘争を「10・8」としてその意義を高めた。同年12月に開催されたブント(共産同)の集会は羽田闘争の総括を「組織された暴力とプロレタリア国際主義」として提起した。蔵田計成『新左翼運動全史』流動出版1978は「この日こそは、六〇年安保闘争以降、混迷を続けてきた革命的左翼がふたたび衝撃的に日本階級闘争の戦列に浮上してきた日として忘れることのできない日となった」とし、すが秀実『革命的な、あまりに革命的な』作品社2003は「ある意味では六八年の前哨であり、ニューレフトが大衆的にヘルメットとゲバ棒スタイルで登場した最初である」と評している。

だがしかし、国際主義という側面からみてもゲバルトという側面からみても、日本の新左翼運動がスタイルを一新したのはその7か月前、1967年2月28日ー3月2日の善隣闘争にあったのではないか。文化大革命の中国から日本への波及としてあったこの闘いで、日本共産党を名の代々木修正主義は、後楽寮生をはじめとする日中両国青年学生に瀕死の重傷4名を含む20数名の重軽傷者を出すという流血をひきおこしたが、これに対する武装自衛の闘いである。当事者からの総括があまり語られないいま、ここでは問題提起のみにとどめておく。

いずれにしても、日本文化大革命としての日本全共闘運動は、日共修正主義に対する積極的批判、反日共諸党派に対する消極的批判として存在した。修正主義に対する批判は、その平和共存路線への批判、つまり必然として暴力革命の主張であった。反日共諸党派に対する批判はおおかたはその政治主義や街頭主義と呼ばれるものへの批判としてあったから暴力への批判ではなかった。

事実、私も当時は、新左翼と全共闘のゲバルトの強さには支持と憧れを持っていた。全共闘では銀ヘルの日大全共闘、党派ではモヒカン(中央の白を両側の赤で挟んだヘルメットはこう呼ばれた)のML派の、向かうところ敵なしの強さには拍手を送っていた。その暴力賛美は、それぞれの背景にある大衆性、道義性への支持でもあったのではないか。

もちろん以降、四半世紀にわたる「内ゲバ」の歴史、とりわけたしか数年前だったか、解放派内での「内ゲバ」で、地方の駅で50歳を過ぎた中年活動家が包丁で切りつけるという陰惨な事件が報じられたときには、彼らが何のため誰のために生きてきたのか、とても痛く心苦しい思いにさせられたことは忘れられない。

繰り返すが、文化大革命を振り返るときに、そこから暴力性を負の側面として取り除いて理想主義や積極面を取り出そうという試みは思想的には無意味である。第一、歴史的事実に合っていない。「悲惨な」暴力性のなかにこそ、文化大革命の魂があり、本質があったのではないか。

この暴力という問題を総括する視点として、フィクションでは、雑賀孫市に率いられた雑賀鉄砲衆による信長への抵抗と闘いを描いた傑作小説『尻喰え孫市』司馬遼太郎1964(ちなみに、晩年の駄作とちがって初期は面白い)、社会から隔絶された囚人たちの解放の祝祭を描いた傑作映画『暴動島根刑務所』中島貞夫監督1975を、また歴史学では、近代移行期における民衆運動の変化と「悪党」という恐怖を描いた、須田務『「悪党」の一九世紀』青木書店2002、を挙げておく。

編集



コメント

コメントを書く

紅衛兵

【関連リンク】

斎藤龍鳳「白色テロへの血の債務」

<http://www.linelabo.com/chinosaimu.htm>

2006年08月16

日

13:50



日中青年学生共闘会議「善隣学館闘争と我々の今後の闘い」

<http://www.konansoft.com/zenrin/html/jpnchnyouth.htm>

(中国研究月報1967年3月号)

後楽寮自治会「日共修正主義グループの華僑青年学生に対する襲撃事件の真相」

<http://home.a00.itscom.net/konansft/zenrin/sinsou/zenrinsinsou.htm>

(発行1967年3月?)

京都・中国史研究グループ「いわゆる「善隣学生会館事件」を批評する」

<http://home.a00.itscom.net/konansft/zenrin/zenrinhiyou.htm>

(1967年5月15日)

スカタン

2006年08月16

日

23:24



善隣闘争の意味については、10月初旬刊の拙著でも少しふれますが、確かに10・8より大きいと思います。

暴力の問題、あるいは戦争機械の問題は、まったく今や問題にされないですが、困ったことです。

削除



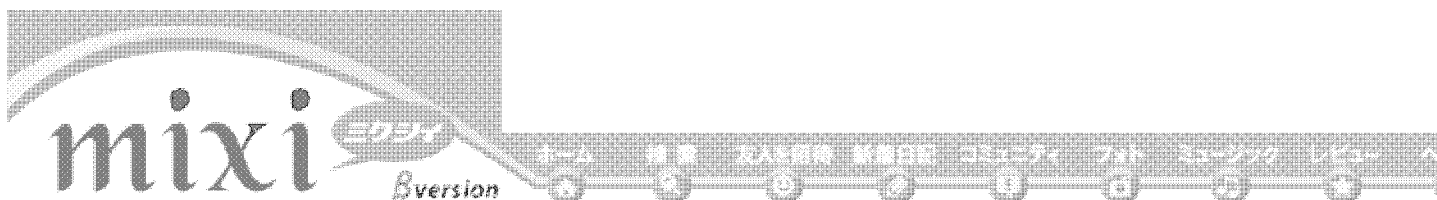
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年08月17 滴水洞 007◆暴力論3 国際主義は即暴力: 滝田修さんの提起

日
01:37

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

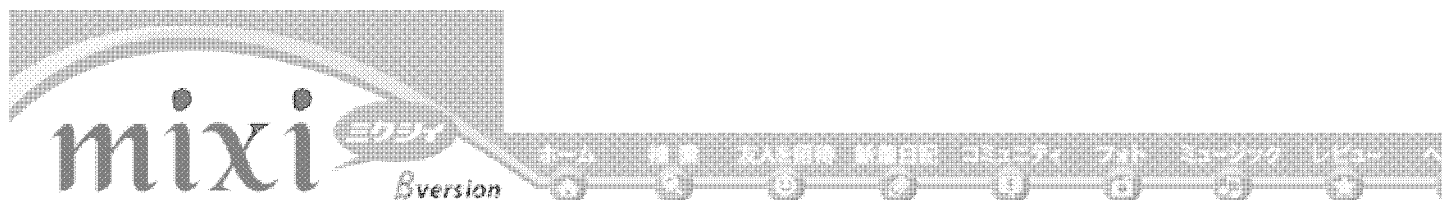
[コメントを書く](#)

「暴力考」で【「いちばん大切なこと」＝暴力(軍事)力量の形成】と強調した滝田修氏は『情況』70年9月号で次のように指摘していた【『ならずもの暴力宣言』所収、芳賀書店1971、pp.256-257】。

【我々はかつて一〇・八以後の過程で、国際主義と組織された暴力という事をいってきた。これは、理論的によく考えていくと、正しくなかったばかりか、我々の体質をいみじくも表現してきたのである。ぶっちゃけて言えば、国際主義が政治的思想的な質をもったものが、暴力を組織すると言ったのだ。国際主義の質で組織するとは、何ということ言うのか。ちがうのだ。国際主義というのは暴力なのだ。逆は必ずしも真ではないが、国際主義は即暴力である。暴力のない国際主義なんか何処にある。国際主義というのは、ブルジョアジーを見てみる、戦争だろ。奴らの国際主義の究極的かつ根源的な形態は、世界戦争、世界制覇だ。奴らも「全世界を獲得する為に」と思っているのだ。奴らの国際主義は、国際侵略主義であり、民族主義は、民族抑圧主義なんだ。それは、暴力に、戦争に、究極的な実現形態を見出す。我々は、少なくとも、ブルジョアジーを鏡として自らの姿を写すスベを身につけなければならない。我々にとっても奴らと同様、国際主義は、国境を越える国際主義のココロは戦争ではないか、間接侵略でしょ、戦争なのだ、軍隊なのだ。国際主義というのは組織された暴力即ち軍隊なのだ。何か同盟があつて、国際主義の質をもった賢い人がいはって、そいつらが暴力を組織するという、濡れ手に粟のような変な話とは違ふのだ。先ず暴力があつて、先ず軍隊があつて、これがやるというのが国際主義である。違ふんか。最初に触れたイージー・ライダーのココロは、このことである。自由について語るの勝手や、誰でも許してくれる。国際主義について語るの何ぼでもエエ、頭の中で国境を越えるのだつたら、何ぼでも越えはつたらよろしいやないか。しかし、ハイジャックでほんまに国境を越えたらアカンという訳や。……国際主義というのは、宣伝運動でもなければ思想運動でもない。この程度のことを今になって確認しなければならんのは、我々を含む日本の左翼総体のインポテンツを語って余りあろう。[中略]軍事力量から疎外された国際主義を、その審判者たるべき地位を客観的に保証された在日朝鮮人が、どうして信用するであろうか。軍事力量の形成を抜きにして、在日朝鮮人にどないして義理が立つと言うんや。絶対に立たない。我々に、国際主義的軍事的力量がないから、在日朝鮮人が、半殺しの目にあっているのを、座視しているのだ。在日朝鮮人を暴力的に迫害する「日本人」住民・右翼に対して、我々日本人が暴力的に敵対し、在日朝鮮人を防衛することが、つまり言い換えるなら、日本人と日本人との暴力的対決によって日の丸国家秩序を揺さぶることが、そうした暴力へと深化することが、国際主義軍事力量の形成の一步とちがうのか。】

民族排外主義か、それとも国際主義か。崇米IT(情報技術)革命か、それとも文化大革命か。——40年前には問題はこうに立てられていた。情けないことに、わが日本の反権力運動は以後、ずるずると後退を続けている。しかし、問題は依然として、同じように立てられているのではないだろうか。

編集

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年08月18 滴水洞 008◆暴力論4 忘れえぬ私の「小さな出来事」

日
14:15

吉越弘泰『威風と頹唐 中国文化大革命の政治言語』太田出版2005、に書かれていたことに目が留まった。

吉越は、湖南省無聯の楊曦光の獄中での体験を彼の『牛鬼蛇神録』牛津大学出版社1994、を引いて紹介している。

【……楊曦光が獄中で同房だった「向土匪」と呼ばれる一人のすりから聞いた話があった。文革前、公安局員から酷い目に遭わされた仲間のすりの一人が、文革の中で復讐のために「長沙青年」という造反組織に加わり、湖南文革が造反派有利になったとき、拘束したその公安局員を痛めつけ、片方の眼を潰してしまったというのである。

「向土匪の話は私を驚かせ不安にさせた。というのは私は保守派と造反派の間の政治的衝突は政治理念の衝突が引き起こしたものとずっと思ってきたからである。私は他の者たちよりは政治的衝突の背後にある社会矛盾に注意をはらってきたにもかかわらず、向土匪の小グループにとって、この種の根深い階級的怨恨と相互の迫害はいかなるイデオロギーも必要とせず、それは相互の赤裸々な迫害と報復そのものとなることに思い至ることができなかった。】同書p.350

革命党入城の知らせをきいただけで挙人旦那が縮みあがったときいた阿Qが「革命も悪くないな」と考える、という『阿Q正伝』を想起させる。

【……かれは、革命党とは謀反であり、謀反は自分にとって不都合だ、という意見を、どこで仕入れたかわからぬが抱いていて、これまでも「深刻に憎悪」してきた。その革命党が意外にも、百里四方にその名も高い挙人旦那を縮みあがらせたあつては、かれとて「恍惚」の気分になる。未荘の有象無象のあわてふためきは、ますますかれを愉快にさせる。】竹内好訳『魯迅文集』第一巻p.134

造反暴力は支配層を恐怖させるだけではない。村を恐怖させる。全共闘もそうであり、文化大革命もそうであった。暴力はその主張(言葉)も行使も、より強い暴力のほうが力を持つ。まして、造反の側の世論に道義性があり、勢いがあるときは、暴力を抑止し自制することは難しい。

かつて私自身、山谷釜ヶ崎の日雇労働者の運動のなかで、行政が飴玉として用意した収容施設の、備品を一部の労働者が「盗った」現場に居合わせたことを思い起こす。

日ごろ酷い目に遭わされているんだからそのぐらい(「取り戻す」こと)は当然の権利だといわんばかりの日雇労働者たちの勢いに直面して、私は沈黙し黙過した。ある活動家が必死に節度と規律、道徳を訴えていたにもかかわらず、その勇気ある彼に加勢することすらしなかった。恥ずかしく、苦い記憶であり、忘れられない。中国の革命運動が経験からうみだした「有理有利有節(＝道理があって利益があつて節度がある)」という合言葉を、知識として知ってはいても、何ひとつ現実の「力」として行使できなかったからである。

編集

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

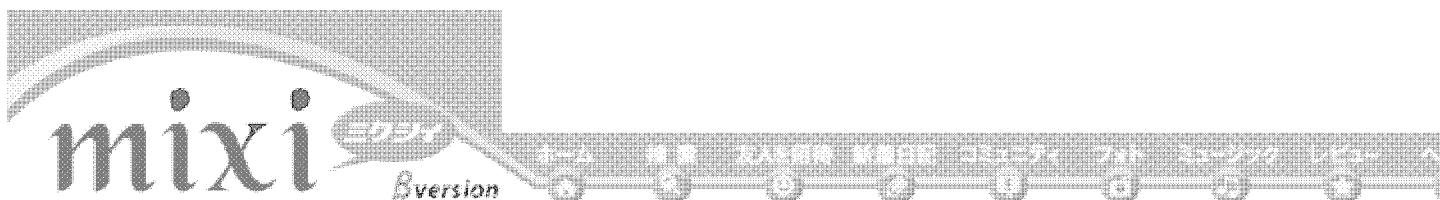
- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧



コメントを書く

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年08月20日 滴水洞 009◆暴力論5「もっとも革命的」と自己確認したい欲望

11:44

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- 一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

文化大革命のさなかの武闘は、小銃から高射砲まで持ち出され、さながら内戦だったという。殺された死体を担いでデモをした証言も複数あるほどだ。

馮驥才、田口佐紀子訳『庶民が語る中国文化大革命』講談社1988、という証言集がある。そのひとつ「ある老紅衛兵の反駁」は、【“文革”のことは、正直言って僕は後悔していない。ざんげするのはかまわない。でも後悔はない。なぜならわれわれは当時、いやしい目的で参加したわけではないから。まじめに革命として受けとめたんだ。】p.167という立場からの、つまり文革全面否定には批判的な証言である。この証言者は(一九六六年 二十歳 男 S市某師範大学学生)とあるから、私とほぼ同じ年代である。

【当時は、保守的だった人ほど造反を始めると、ひどく殴った。これは“文革”の特徴です。こういう話が聞きたいかどうかかわからないけど、つまりもともとは造反派ではなく実権派にっていた人たちが、造反を始めると、もっともひどく実権派を殴ったんですよ。こういう方法で、自分たちがもっとも革命的だということを示そうとしたんだ。彼らこそが“極左”の根元なんだ。もともとは実権派にっていた。しかし情勢が変わったのを見てとると、造反派よりもっと残酷に極左的に実権派をやった。これは僕が“文革”の中で目撃した一つの現象です。】p.150

【どういわけかあの頃は、みんな自覚が高くてね。不良とかコソ泥はほとんどいなかったから、何をするにも安心だった。おそらくあの異常な恐怖が、不良までも震えあがらせてたんでしょね。人民間の管理はそりゃあきびしくて、とにかく毛主席の語録が読めさすりゃあ、木戸御免だった。中国全体が、ちょうどバスケットボールの試合のように、相手の一挙一動に目をつけていたわけだ。ここでしたあくびが、あつちで聞こえるというぐあいだね。今よりずうとよく管理されていたね。】p.154

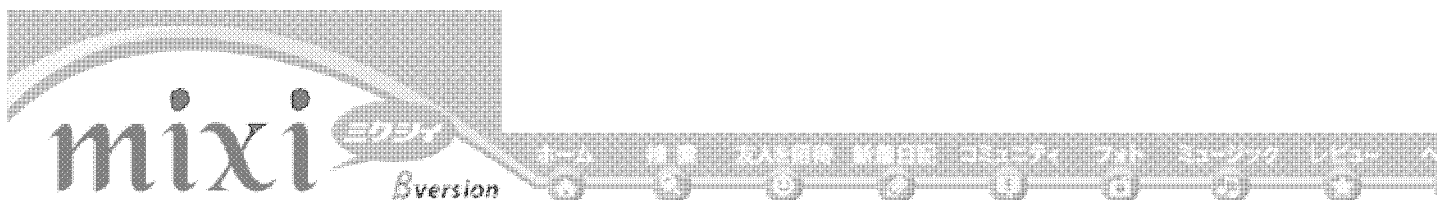
【中国人というのは、つまらない事ほど、みんなが興味をもち、徹底的にやる。彼がいかに修正主義を行い、反革命を鼓吹したかを批判するだけでは、大衆は批判に身を入れない。まず彼の名誉を傷つける。そうすれば政治的にも自滅する。やりやすいわけだ。】p.158

たしかに日本の全共闘運動でもバリケードの中は「治安」はよかった。欲望が、物質的な方向、私欲にはあまり向けられないからだろう。闘争と運動に向く。闘争と運動に向くから、自分が他者から認められたいという欲望もまた、その闘争と運動のなかで「より先頭にいる」「より徹底している」ことの確認に向く。矜持は驕慢と、誇りは自己満足と(そして謙虚は卑屈と)現象では紙一重かもしれない。口舌の徒を馬鹿にするのも行き過ぎると俗流経験論に陥り、何かというと「やった」「やった」と威張ることになる。何をやったというのか。何のため、誰のためという問い、自問、自省は、ともすればなおざりになった。

アメリカ的な欲望、個人的物質的欲望と闘う第一歩、それは捨てることであり、拒否することである。これはまだしも比較的わかりやすい。しかし、その次、自分が認められたいという欲望とどう向かい合うのか。なぜ競争になるのか。

編集

コメントを書く

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年08月21 滴水洞 010◆続・むほんの権原はどこにあるのか

日
11:21

いま出ている『ビッグコミック増刊 ゴルゴ13総集編 vol.144』小学館2006/9/13、に「百人の毛沢東」という話載っている。

——激動の中国。その次代を担うカリスマはいかに作られるのか……？ 中国辺境の原野に、百年前の風俗を忠実に模した村々があった。そして奇妙に同じ顔の少年たちがひとつの村に一人ずつ、すくすくと育っていた。一体誰が何の目的で……？ 実は、失脚させられた党長老の漢卑将軍が、死んだ毛沢東の体細胞からつくったクローンを、再現した同じ環境で育て、そのクローン毛沢東を担いで謀反を起こそうとする、というお話。

以下、漢卑(H)とゴルゴ(G)とのやり取り。

H:だが、テロリスト風情のお前には、決してわかるまいが……今の中国には、毛沢東は無くてはならない存在なのだ！

G:……今の中国に必要なのではなく、今のお前にとって必要なのだろ。

H:な、何っ！！

G:いくら、毛沢東のクローンを蘇らせても、いくら同じ環境を作っても、あのような男は、二度と生まれない……なぜなら彼は、中国の人民によって作り上げられた、“人物”だから、だ……

今、彼のような人物が生まれないのは、真に中国人民が欲してはいないから、だ……

H:ち、違うっ！！ 中国人民も絶対に、偉大な毛沢東の出現を待ちわびているはずだっ！！

G:毛沢東と過ごした、若かりし頃の華やかな思い出を、クローンを蘇らせてもう一度味わおうなどと……最期の“革命戦士”も、老いたものだ……

H:ううっ！！……も、もう少しで毛沢東と二人でもう一度、真の共産主義国家を、創れたものをっ！！……

G:……

H:おのれっ！！ <ドキューン……>

G:……時代を逆行させる事は、誰にも出来ない……思い出は懐かしむだけにしておく事だ……

そう、ゴルゴのいうとおり、ひとりひとは歴史と社会がつくりだすのだ。毛沢東もひとりひとりの紅衛兵もそうである。日本文化大革命の紅衛兵も。だからこそ、ひとりひとりの生命と生涯は誰一人同じではなく、かけがえないものなのである。

生物学的なクローンを再現した「同じ」環境で育てれば同じ人間が出現するなどという荒唐無稽な物語は、文化大革命のさなかで大論争になった出身階級決定論(出身血統主義)の鏡像のように私にはみえる。

人間は生まれによって決定づけられるする狭隘な血統論は根深い。そこには旧階級の刻印が押されている。旧い階級は支配の根拠として、生まれによる違いは超えるに超えられぬ違いとして刻印されているという血統論を重視してきた。また血液型や生まれ日時による「占い」などの習慣として生きつづけている。

しかし、革命(むほん)がその根拠としてこの狭隘な血統論をただ裏返して使う(「差別された痛みは差別された者にしか理解し得ない」というように！)と、それは逆差別を生み、「血統論」に反抗するエネルギーをマグマのように蓄積させ

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

最近の日記

[滴水洞 023◆中国革命の原点、](#)[百度\(Baidu\)、来年から日本語](#)[滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶](#)[滴水洞 番外02◆江尻健二さんの](#)[滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想](#)[北京からの報告\(2\)](#)[北京からの報告\(1\)](#)[もっと読む](#)

最近のコメント

[一覧を見る](#)

8月の日記

- [2006年12月の一覧](#)
- [2006年11月の一覧](#)
- [2006年10月の一覧](#)
- [2006年9月の一覧](#)
- [2006年8月の一覧](#)
- [2006年7月の一覧](#)
- [2006年6月の一覧](#)
- [2006年5月の一覧](#)
- [2006年4月の一覧](#)
- [2006年3月の一覧](#)
- [2006年2月の一覧](#)
- [2006年1月の一覧](#)

る。

文化大革命における遇羅克による出身決定論批判は、狭隘な血統論に対するおさえきれぬ反抗の噴出だったのではなかったか。陳伯達による中央の見解表明も、血統論を批判し、本人の政治的態度をみるといいながらも、出身（親の階級区分）も考慮すべき、と、いつけん「正しい」ように見えるが、この現実の論争にわけいるには、あまりにも腰の引けた折衷論ではなかったか。

[編集](#)



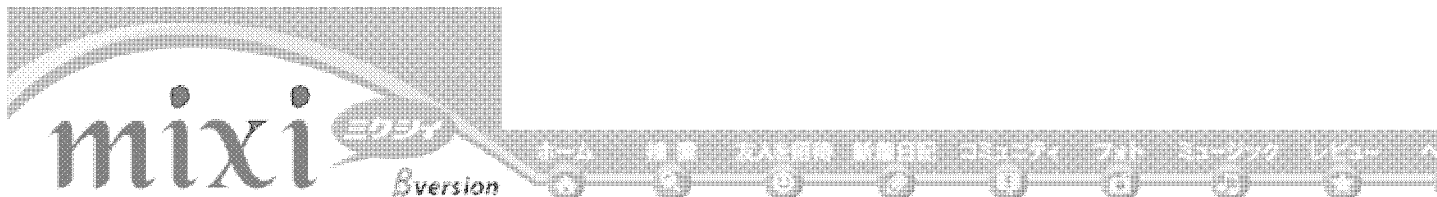
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.



[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年08月24 滴水洞 011◆フーコーによる裁判批判

日
11:38

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

文化大革命を否定する人びとの意見のひとつに、公開批判、公開処刑は「野蛮」だという反発がある。西欧近代が実現してきた裁判制度は人類の「到達点」のひとつだが、これのほうが野蛮だと私は思うのだ。なぜなら《復讐の権原》という基本的権利を、国家に委託してしまうことによって、放棄するものだからだ。そのことによってますます国家のドレイになってしまい、何ひとつ道理も利益もないではないか。この本質を理解できない日本の新旧左翼は最近も裁判員制度を批判できずその走狗となっているが、まことに情けないことである。

M.フーコーは1972年「人民裁判について マオイスト(毛沢東主義者)たちとの討論」でいいことを言っている[ちくま学芸文庫版『フーコー・コレクション 4』2006年、pp.96-154]。少々長くなるが耳を傾けてみよう。

【……裁判所というものは人民の正義の自然な表出などではなく、むしろ反対に、歴史的機能として、その正義を国家装置独特の諸制度の内部にあらためて書き込むことにより、正義を引っ捕らえ、飼ひ慣らし、組み伏せることをもって旨とするものなのではないか。[中略]…舞台では、長机の後ろにひかえた判事たちが、「復讐を叫ぶ」人民と、「有罪」であったり「無罪」であったりする被告たちとのあいだの第三の審級を代表する。「真実」を確定するため、あるいは「自白」を得るための尋問があり、何が「正当」であるかを知るための審理がある。つまり、権威の手によって万人に押しつけられた審級である。ここには、まだ崩れ易さの感ほぐえなないとはいえ、一つの国家装置の萌芽が再び姿を現しているのではないかと 階級的抑圧の可能性が再び姿を現しているのではないかと 人民とその敵のあいだに、真と偽、有罪と無罪、正当と不正の区別を打ち立てるものとして一個の中立的な審級を設置するということは、人民の正義に対抗するための手段ではないか？ 観念的な仲裁を盾にとり、現実の闘争における人民の正義を非武装化するための手段なのではないか？ 裁判所とは、人民の正義の一形態であるところか、その最初の歪曲なのではないか、と僕が疑うのもそうした理由による。】pp.97-98

【……被告原告双方に対して中立の立場を取る人々が存在し得るという考え方、彼らが絶対的な価値をもつ正義の観念に基づいて双方を裁き得るという考え方、そして、彼らが決定したことは実行に移されなければならないという考え方、僕は、もうこれだけでかなり深刻な意味をもっていると思うし、また、そうした考え方が、すでに人民の正義という観念そのものと無縁になっていると思う。人民裁判の場合、三つの要素があるわけではない。あるのは大衆とその敵だ。その場合、大衆が誰かを敵とみなし、その敵を懲らしめてやろう——あるいは再教育してやろう——と決意する時、大衆は、正義という抽象的な普遍概念などには頼らずに、単に自分たちの経験に依拠する。つまり自分たちが受けた損害の経験、自分たちが傷つけられ、虐げられた時のやり方に倣うのだ。しかも、彼らの決定は権威をともった決定ではない。つまり、彼らは決定事項に価値をもたせる能力を備えた国家装置などには頼らずに、単純かつ純粋に自分たちの決定を実行に移すのだ。したがって、僕の拭い難い印象としては、裁判所という組織、少なくともその西欧的な組織が、人民の正義という実践とは無縁たらざるを得ない、ということだ。】p.108

【……われわれのような社会においては、逆に、司法という装置がきわめて重要な国家装置であり続けてきた。ただ、その歴史が常に覆い隠されてきただけである。[中略]刑法体系は大衆のなかにいくつかの矛盾を持ち込むことをもって、その機能としてきた。そして、その矛盾の最たるものは、プロレタリア化した下層民とプロレタリア化していない下層民を互いに反目させる、というものだ。中世にお

いて本質的に収税機能を果たしていた刑法体系が、ある時代以降、暴動抑止の闘いに専念するようになった。それまで、民衆暴動の鎮圧はとりわけ軍隊の仕事だった。それが、ある時から、司法＝警察＝監獄の複合システムをもって対処される、というよりもむしろ予防されるようになったのだ。〔中略〕…物乞い、浮浪者、無為の者たちを対象にした数々の法、彼らを狩り出す目的で作られた数々の警察組織といったものはすべて、物乞い、浮浪者、無為の者たちが置かれたまさにその場所で、彼らに対して用意されたきわめて劣悪な条件を、力づくで——法や組織の役目はまさにそれだったのだから——受理させていたのだ。当人がその条件を拒んでも、逃げ出そうとしても、物乞いを続けても、あるいは「何もしない」でいても、結局行き着くのは監獄、そして多くの場合、強制労働であった。他方、この刑法体系が特権的な対象としていたのは、下層民のなかでも最も可動性にすぐれ、最も激しやすく、最も「暴力的」な分子、つまり、いつ直接武装行動に出ても不思議はない連中であつた。借金で首が回らなくなって土地を捨てた農夫、納税をすっぽかしてきた農民、盗みのかどで土地を追われた労働者、町のどぶ掃除に従事することを拒んだ浮浪者や物乞い、畑荒らして暮らしをたてている者たち、こそ泥、追いはぎ、あるいは、武装集団をなして税務署その他、役人たちの所に襲撃をかける者たち、要するに、都市や地方の暴動に槍や鉄砲をもって加わる連中、こうした人々のあいだには、見事な合議、完全な連絡網のようなものが存在し、そのなかで個人がその都度役割を取っ替え引っ替えしていた。こうした「危険な」連中こそ、別の場所に（監獄に、総合病院に、ガレー船に、植民地に）取りのけておかねばならなかった。民衆の抵抗運動の際、彼らに斬り込み隊の役目を果たさせないようにするためである。こうした恐怖が十八世紀に増大した。同じ恐怖が、大革命直後、あるいは十九世紀をつうじてさまざまな擾乱の際、さらに増大した。そこで刑法体系の第三の役目が際立つのだ。つまりプロレタリアートの目に、プロレタリア化していない下層民の姿を、周縁的、危険、反道徳的で、社会全体にとっての脅威、民衆の残滓、屑、いわゆる「賊」として映し出してやるのだ。ブルジョワジーにとっては、刑罰の法体系をつうじ、監獄をつうじ、さらには新聞や「文学」をつうじて、「普遍的」とされた道徳のいくつかのカテゴリーをプロレタリアートに課することが主眼となる。この自称「普遍的」道徳カテゴリーが、プロレタリアートとプロレタリア化されていない下層民とのあいだでイデオロギー的な障壁の役目を果たす、という仕組みだ。……】pp.117-119

編集



コメント

コメントを書く

shumi

2006年09月02日

日

20:29



こんにちわ。足あとあつたので、見にきたら面白い文章が載ってたので、ご挨拶させていただきます。

プロレタリア化されていない偽？下層民です。英会話もできないバカインテリ呼ばわりされてるけど^^;よろしくお願いします。

ちょっと難しいですが、面白かったです。アク禁されなかったら、また見に来ます。コメントはあんまりしないかも、ですが。

紅衛兵

2006年09月02日

日

20:40



shumiさん、ようこそ！

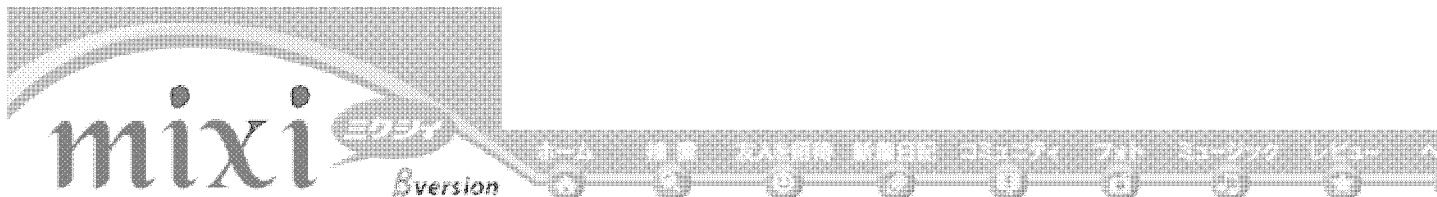
お邪魔させていただいたら、ジャックスや浅川マキやら……、ドキドキするほど嬉しかったです。また、お立ち寄りください。

削除



コメントを書く





トップページ | メッセージ | 日記 | ミュージック | おすすめレビュー | お気に入り | 足あと | プロフィール | 設定

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年08月26 滴水洞 012◆再びみたび教育革命を！

日
13:09

< 8月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

一覧を見る

8月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

最近、中国福建省のある市での、高校入試で高額納税者の子どもに対する優遇が報じられた。

「中国：高額納税者優遇 子供の入試に得点加算 福建省の市」毎日新聞 2006/8/7付

<http://www.mainichi-msn.co.jp/today/news/20060807k0000e030013000c.html>

「まあ中国はなんて野蛮なんでしょ」と憤慨してみせるのが、崇米IT革命に屈し、“ものを視る目、感じる心”を喪失した見方。これに対して、国連の「高等教育の漸進的無償化」勧告[関連リンク: <http://www.jfpu.org/2006data.htm> ほか]に対してずるずると留保を続ける日本政府とて同罪、どこに教育の機会均等など存在するのか、と目前の日本の現実にひきつけて見るのが日本文化大革命の見方である。いまこそ、腐臭を放つ日本と中国の教育制度に対して日本と中国の青年は文化大革命という「むほん」を起こすときではないだろうか。

今夏、私が書いた「「むちゃくちゃだ」と「すばらしいことだ」 日本文化大革命四十周年に際して」

<http://www.linelabo.com/bunkaku40nen.htm>

のなかでも紹介したが、1966年6月6日、北京の高級中学生(日本の高校生にあたる)が提起した旧進学制度廃止要求の檄は、すばらしい。これは、いま読み返しても、当時から私が文化大革命に共感し、正しいと思ったことは間違いではなかったと確信できる檄文である。

『中国プロレタリア文化大革命資料集成 第一巻』東方書店1970年から一部抜粋して紹介しておきたい(pp.351-355)。

【親愛な党中央、親愛な毛主席

わたしたちは、北京市第一女子中学の本年度卒業予定の高級中学生です。わたしたちは、革命的なげしい感情にもえて、あなたに手紙をさしあげます。それは、あくまで革命をおこない、すべての旧教育制度を徹底的に粉砕しようとする、わたしたちの決意を表わすためです。

世界革命が発展し、わが国の社会主義文化大革命が一步いっぽ深まるにともなって、わたしたちはつぎのことをますます深く感じとっています。それは、われわれの世代の青年が、まさに、中国革命と世界革命をひきつづき前進させるうえでのきわめて大切な世代だということです。[中略]中国の社会主義革命を最期までおしすすめ、帝国主義、修正主義、各国反動派を一掃し、世界革命を最期までおしすすめる重任は、われわれがになわなければなりません。[中略]今回の文化大革命のなかで、ふるい大学入学試験制度を粉砕する責任は、まず第一に、わたしたちの肩にかかっています。わたしたちは現行進学制度にたいするわたしたちの見方をのべてみたいと思います。

わたしたちは、現行進学制度が数千年にわたる中国封建社会の旧科举制度の延長であり、ひじょうにおくれた、きわめて反動的な教育制度である、と考えています。[中略]現行の教育制度は、毛主席の指示にしたがつてつくられたものではありません。それは、実際には、肉体労働と精神労働、労働者と農民、都市と農村の三大差異を拡大し、存続させるものです。その具体的な罪状はつぎのとおりです。

(一)多くの青年を、革命のために学習するのではなく、大学の入学試験をうけるために書物の山に頭をつっこみ、政治に関心をもたせないようにしています。「高尚なのは本を読むことだけだ」とか、「名を成す」とか、「一家を成す」とか、「個人的に奮闘する」とか、「白色専門家(ブルジョア専門家の道をすすむ＝訳注)」とか、搾取階級の反動思想に、つよくそまっている生徒も少なくありません。現行の入試制度は、こうした思想を助長しているのです。

(二)多くの学校に進学率を一面的に追求させ、もっぱら「優等生」を入学させる。多くの「特殊」、「重点」学校をつくりだしています。これらの学校は、本だけにかじりつき、政治に関心をよせない一部のものに大きく門をひらいて、労働者、農民、革命的幹部の多くのすぐれた子弟には門をとざしています。

(三)学生の徳、知、体の全面的成長を、はなはだしく妨害する役割をはたしています。とくに、徳育において、そうです。このような制度は、青年の思想の革命化を根本的に無視しており、その本質は鄧拓ら黒い一味のいう「資質に応じて教え」、「資質に応じて用いる」というものです。

したがって、このような進学制度は、資本主義の復活に奉仕するものであり、新しいブルジョア分子、修正主義分子を養成する道具であります。鄧拓ら反党の黒い一味がそれを最高の宝物としてもちあげ、アメリカ帝国主義が得意満面で「平和的転化」の期待を中国の「技術官僚」、「イデオロギー専門家」に寄せているのもなんな怪しむにたりません。……】

編集



コメント

[コメントを書く](#)

2006年08月28

日
08:05

紅衛兵

文革をふり返り、記念し、考える、この連載「滴水洞」は順次、わたしのウェブページで公開していきます。

<http://www.linelabo.com>

削除



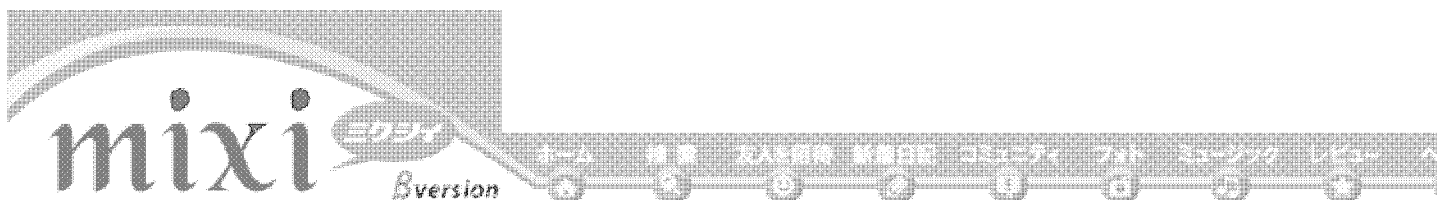
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年09月07 滴水洞 013◆暴力論6 国家によって独占された暴力

日
03:10

< 9月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

- 一覧を見る

9月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

国家による暴力の独占。アンソニー・ギデンズの暴力批判は、国内では(目的にかかわらず)一切の暴力を非合法とする国家が、国外においては(目的次第では)暴力を認めている——国際法は交戦権という「権利」を前提にする——というダブルスタンダードに対する批判へと向かう。

しかしこれは幻想であり、事実と合致していない。奴らのスタンダードはダブルなどではない。国内における監獄の存在、典型的には死刑は国内における国家権力がしかけた戦争のひとつの形態である。交戦権が「敵国」の存在を前提とすることと同様、死刑制度は殺すことが合法的に認められた「非国民」の存在を前提としている。

憲法九条を擁護するなら死刑廃止を不即不離のものとして追求しなければならない。交戦権放棄と死刑廃止を一体のものとして捉える闘いこそが護憲運動にはじめて生命力を蘇らせる。そうでない護憲運動、平和運動はウソ偽りに満ちたものであり、結局は人殺し制度を支え、延命させるものである。

文化大革命は「近代」国家が、諸個人から奪い取った《復讐の権原》《暴力の権原》を取り戻そうとした、大きな実験だったのではないか。

こう書くと、では文化大革命の批判大会や日大全共闘の大衆団交のような「乱暴な」やり方の先に何があるのか、と人びとはあせって尋ねるかもしれない。

「滴水洞011」で紹介した「討論」でも対論者の「では君は、人民の正義をいかにして規範化しようというのか?」という問いに対して、M.フーコーはこう答えている。

【その問いには、ふざけていると思われるかもしれないが、「これから発明しなければならない」とだけ答えておこう。大衆は——プロレタリアも下層民も——これまで何世紀ものあいだ、この正義に苦しめられてきたので、どんなに新しい内容を盛ってみたところで、その古い形態を彼らに認めさせることはもはや不可能だ。〔中略〕フランス革命も反＝司法的な反抗であった。フランス革命が最初にふつ飛ばしたのが司法装置だったのだから。パリ・コミュンもまた根本的に反＝司法的なものであった。／今後、大衆は、彼らの敵、すなわち個人的にであれ集団的にであれ彼らに害を及ぼしてきた者たちの問題を清算する手段を見つけていこう。懲罰から再教育まで、さまざまな反撃手段があり得るだろう。ただ、裁判所という形態だけは経過してはならない。】pp.138-139

【僕も君と同じで、階級の敵への応酬としての正義行為を、闘争の全体に統合されていない、その場しのぎの軽はずみな自主性のようなものに委ねておくわけにはいかないと思う。実際に大衆のなかに存在するこうした反撃の欲求については、議論、情報などをつうじて、それを精練してゆくための形態を見いださなければならないだろう。いずれにしても、二組の当事者と、即時かつ対自として存在する正義に応じて決定を下す中立的な審級という三者体制を基本とする裁判所は、人民の正義を政治的に明確化、精練してゆく上でとりわけ有害なモデルであるように思われる。】pp.140-141

【裁判所という形態そのもののなかには、とにかく次のような事態が見られるのだ。つまり、二組の当事者に向かって、こう告げられるのだ。「あなたがたの言い分は、事の初めから正当であったり不当であったりするのではなく、わたしが判決の言い渡しを行う、その日を待って、はじめて正当なものとなったり不当なもの

のとなったりするのだ。言うまでもない、その日までに、わたしが永遠の公正さをもつ法律と裁判記録のすべてを繙き終えているからである」と。これこそが裁判所の本質であり、人民の正義という視点からすれば完全な矛盾なのだ。[中略]つまり、公明正大に、わが身のことなど毫も気にかけずに判決を下す——あるいはそのふりをする——人々がいることにしてしまうと、そのことにより、判決が正当なものとなるためには、それが誰か無関係の者、知識人、観念性の専門家によって下されなければならない、という考え方が補強されてしまう。[中略]何が人民の正義であるのか、という一般的なモデルを作り上げようとする時に、もっとも悪質なモデルが選択されてしまうのではないか、…】pp.140-142

実験であるから、成功もあれば失敗もある。行き過ぎもある。行き過ぎのない実験、失敗のない実験ならば支持するなどというたわごとは、自分が何もしない卑怯者であることの告白でしかない(フランスの五月を「革命」と呼び、日本の全共闘運動を「紛争」と呼んで、疑うことのないほどに言語感覚の歪んだ莫迦・渡辺守章からフォーコーを取り戻さなければならない)。

《復讐の権原》《暴力の権原》を国家から諸個人に取り返し、しかるのちに〈放棄〉してこそ、復讐や暴力は廃棄されるだろう。

※著作権が諸個人に真に取り戻されてのちに放棄、公開されて活きる、というプランについては、拙稿「技術がく人間と労働」にもたらししたものへの問いかけ
歴史のなかの知恵蔵裁判」2001参照。

<http://www.linelabo.com/chie0011.htm>

編集



コメント

コメントを書く

サツコ

2006年09月08日
08:23



足跡からやって参りました。
凄く面白かった+勉強になったので残していきます。

国家ってほんとうにいわくつきの怪物ですね・・
最近あたしが恐ろしく感じていることは革命に立ち上がるはずの層がウヨ化していることです・・絶望的な気分になります・・

紅衛兵

颯子さん、こんにちは。

2006年09月08日
08:47



【国家はすべての冷酷な怪物のうち、もつとも冷酷なものとおもはれる。それは冷たい顔で欺く。欺瞞は、その口から這ひ出る。
「我国家は民衆である」と。
ニーチェ・ツアトラウストラはかく語る。】

金子光晴「寂しさの歌」からの孫引きでした……

サツコ

2006年09月08日
12:06

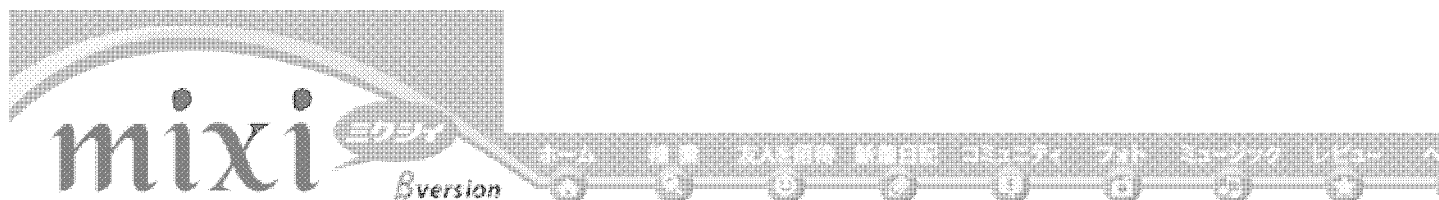


・・ほんとに・・..
だけどニーチェやフォーコーの鋭い視点は読んでいてスリリングなので好きです。
まだまだ読んでいませんが。
また覗かせてもらいますね!お邪魔いたしました!

削除



コメントを書く

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年09月17 滴水洞 014◆文革総括の原点としての近代批判

日

11:07

私が文化大革命(文革)を考え直そうとする目的はどこにあるのか。

目的意識がすべてを貫く。

溝口雄三さんは「竹内氏の中国論も、動機や目的を日本の“近代”批判のなかにおいていた点で、また中国の近代過程の実態に関心が向いていなかった点で、要するに日本論だったのであり、それもまた自己中心的」と竹内好の中国論を評したが、バカ言っちゃいけない、ものを見る立場という決定的に重要な問題がわかっていない。すなわち、一方における、自己をも含む世界を対象にし続けた竹内好の素晴らしさであり、他方における、自省と自己変革なき、学問のための学問に溺れた莫迦者の愚かさである。

加々美光行さんは『逆説としての中国革命〈反近代〉精神の敗北』田畑書店1986(『歴史のなかの中国文化大革命』岩波現代文庫2001に再収録)で文革研究の動機と問題意識を次のように書いた。

【……文革が真に過去の歴史と化したのならそれもよい。その時には文革が冷静な目で研究対象として扱われ得るはずだからだ。しかし、実際には今日に至ってなお、文革はその全体の脈絡を欠いた断片が取り沙汰されるのみで、本格的な研究対象として扱われているとは言い難く、むしろますます忘れられる傾向にあるのが実情である。

どうして文革がこうも過去の遺物となり果て忘れられるようになったのか、…】岩波現代文庫版(以下同)p.2

【……今日かえりみても、毛沢東の中国が西欧的意味での「近代化」を選択せず、いわば「反近代」の道を行っていたことは疑う余地がない。溝口のいうようにその「反近代」が依然、西欧「近代」を尺度とした「近代批判」に過ぎず、それゆえなおヨーロッパ回路で歴史を見る枠組みから出るものでなかったにせよ、その二十世紀的意義を否定し去ることはできないと私は今も考えている。】p.6

「私は毛沢東の文革発動の動機を没理念的な権力闘争と見なすのではなく、中国の社会主義理念の解釈をめぐる対立に由来すると見なしていた。またこの理念の対立は、社会主義体制下に中国が「近代」の道を選択するか、それとも「近代批判」の道を進むかの争いでもあったと考え」p.9た加々美さんは、「毛沢東の中国が「近代批判」の道を行っていたと評価し得る具体的な事実」として四つの基本的事実を挙げているが、私も同意する。

【第一に、一貫して自由主義経済システムを敵視する傾向に、第二には、三大差別撤廃(都市・農村間差別、工業・農業間差別、頭脳労働・肉体労働間差別の三つの差別の撤廃をいう)の実現を目指す政策実践に、第三に、欧米の近代科学技術を「洋法」と呼び、「土」を基礎に「洋」との結合による科学技術革命を謳ったこと、第四に、大躍進・三面紅旗政策の時期に登場した鞍山製鉄所の「両参一改三結合」(鞍鋼憲法)と呼ばれる経営方式や山西省昔陽県大寨人民公社の労働点数相互評価制に見られる所得分配方式など、コミュン型の参加型経営方式に見出すことができた。】p.7

初期文革の1966-69年と中学の3年間がびったり重なっていた私にとって、文革は全共闘運動の彼方の夢であった。しかも、朝になればさめてしまう夜の夢ではなく、現実の昼の夢だった。だからこそ、同時期に読んだフランツ・ファノンの次のような呼びかけ＝檄とびったり符合して、私は受けとめた。それは今も変わ

< 9月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

最近の日記

滴水洞 023◆中国革命の原点、

百度(Baidu)、来年から日本語

滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶

滴水洞 番外02◆江尻健二さんの

滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想

北京からの報告(2)

北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

一覧を見る

9月の日記

2006年12月の一覧

2006年11月の一覧

2006年10月の一覧

2006年9月の一覧

2006年8月の一覧

2006年7月の一覧

2006年6月の一覧

2006年5月の一覧

2006年4月の一覧

2006年3月の一覧

2006年2月の一覧

2006年1月の一覧

らない。

【さあ、同志たちよ、いま直ちに船を乗りかえる方が賢明だ。われわれが陥った巨大な夜の闇をやり動かし、そこから出てゆかねばならない。……

ここ数世紀ものあいだ、ヨーロッパは他の人間の前進を阻み、これを己れの目的と己れの栄光とに隷属させた。数世紀来、いわゆる「精神の冒険」の名において、ヨーロッパは人類の大半を窒息させてきたのだ。……

ヨーロッパはただ人間に対するときのみ、ひたすらけちけちしていた、ただ人間に対してのみひたすらさもなく、人食いの姿を示したのであった。……

さあ、同志たちよ、ヨーロッパの芝居は決定的に終わった。別のものを見出さなければならない。われわれは今日すべてのことが可能なのだ。ただしヨーロッパの猿真似をしないという条件で、またヨーロッパに追いつこうとする執念にとりつかれないという条件で。

ヨーロッパはあまりのスピードを、気違いじみた滅茶苦茶なスピードを獲得した結果、今ではいっさいの案内者、いっさいの理性の手を逃れ、怖ろしい眩暈にかられつつ奈落に向かって進んでいる。遠ざかる方が賢明だ。……

ヨーロッパの技術と様式に人間を求めるとき、私は人間否定の連続を、雪崩のような殺人を見る。

人間の条件、人間の企図、人間の全体性を増大する仕事のための人間同士の協力、これらは新たな問題であり、文字どおりの創造を要求している。

ヨーロッパの真似はしまいと心に決めようではないか、われわれの筋肉と頭脳とを、新たな方向に向かって緊張させようではないか。全的人間を作り出すべくつとめようではないか——ヨーロッパは、その全的人間を勝利させることがついにできなかったのだ。

今から二世紀前、あるヨーロッパの元植民地が、ヨーロッパに追いつこうと考えた。その植民地はこれにすばらしい成功を収めたために、アメリカ合衆国は、ヨーロッパの欠陥、疾患、非人間性を、怖るべき次元にまで高めた怪物と化した。

同志たちよ、われわれには第三のヨーロッパを作るほかになすべきことがないのか。〈西欧〉は〈精神〉のひとつの冒険たらんとした。〈精神〉の名において——西欧精神という意味だ——ヨーロッパはその罪業を正当化し、人類の五分の四を隷属化したのも正しいことにしてしまった。……

今日われわれはヨーロッパの停滞に立ち会っている。……

〈第三世界〉は今日、巨大なかたまりのごとくにヨーロッパの面前にあり、その計画は、あのヨーロッパが解決をもたらさなかった問題を解決しようと試みることであるはずだ。

だが、この場合に、能率を語らぬこと、〔仕事の〕強化を語らぬこと、〔その〕速度を語らぬことが重要だ。否、〈自然〉への復帰が問題ではない。問題は非常に具体的に、人間を片輪にする方向へ引きずってゆかぬこと、頭脳を摩滅し混乱させるリズムを押しつけぬことだ。追いつけという口実のもとに人間をせき立ててはならない、人間を自分自身から、自分の内心から引きはなし、人間を破壊し、これを殺してはならない。

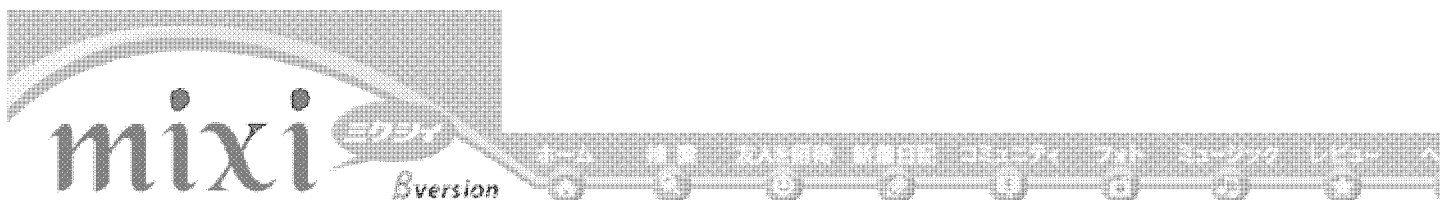
否、われわれは何者にも追いつこうとは思わない。だがわれわれはたえず歩きつづけたい。夜となく昼となく、人間とともに、すべての人間とともに。……

〈第三世界〉にとっては、人間の歴史を再びはじめることが問題だ——その歴史は、ヨーロッパによって提出されたテーゼ、ときには目ざましくもあったテーゼを考慮するとともに、またヨーロッパの犯罪をも考慮するだろう。その最もいまわしい犯罪は、人間の内部においてはその機能を病的に分裂させたことであり、またその統一を粉々にしたことであろう。共同体〔社会〕の枠内においては、裂け目を、層を、階級によって養われた血なまぐさい緊張を、作り出したことであろう。また人類という巨大な次元においては、人種的憎悪、奴隷制度、搾取、そしてとりわけ一五億の人びとを排除することによって形成される血を流させるジェノサイドであろう。

だから同志たちよ、ヨーロッパから想を得た国家・制度・社会を作り上げて、ヨーロッパに貢ぐことはやめようではないか。……

われわれがもしアフリカ大陸を新たなヨーロッパに、アメリカ大陸を新たなヨーロッパにと、変えたいならば、そのときは、われわれの国の運命をヨーロッパ人の手に委ねよう。彼らはわれわれのなかの最も能力のある者よりも、さらに巧みにこれをやってのけるだろう。

だがもし人類の少しでも前進することを望むなら、もしヨーロッパの表明した人類の水準とは異なった水準に人類を押し上げようとするなら、そのときは創造せねばならぬ、発見せねばならぬ。……】『地に呪われた者』みすず書房1968/1996再刊pp.308-313

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年09月18日 滴水洞 015◆文革総括における日本文化大革命という立場と観点

14:22

< 9月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- 一覧を見る

過去の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

文化大革命の理念、原点の基本について014で述べたが、その後明らかになった悲惨な暴力をどう思うのかと問う読者もおられよう(すでに暴力論1~6やむほんの権原(正・続)でいくつかの事柄については述べてきた)。私はこれまでも意識的にいわゆる右派言論と向きあうことによって自らの思想形成をしてきた。それは中学のときの産経新聞、とりわけ柴田穂氏の文革報道を反面教材として読み込むことが出発であったから、その後の内戦ともいべき暴力的衝突の報道に接しても、また80年代の傷痕文学を読んでも、文革支持は揺るがなかったのである。

それは今、振りかえってみると、自らが身を置いた全共闘運動を日本文化大革命ととらえる立場と観点に支えられていたからだと思える。日本文化大革命という言葉は、津村喬さんが使いだしたものだだったが、当時の私にはとてもぴたりと受け入れられた。級友たちとつくったサークル、現代史研究会で出したガリ版のサークル誌『現代史研究』No.1(1970年5月)の編集後記には「〈4・13テーゼ〉現代史研究会運動は偉大な日本文化大革命の灘高における一形態である。」と記している。

文化大革命を没理理念的な権力闘争としてみるのではなく、新たな社会主義の実験としての意義を捉えなおそうという立場において、共感をもって私も受け止めた加々美光行さんの文革研究はどうなったか。彼は、1980年には血統主義をめぐる対立に焦点をあてて、紅衛兵資料の紹介と分析を行ない(私はここから多くを学んだ!)、「仮説提起」にいたった。

【その仮説とは第一に、文革期の造反有理、四大民主(……)が一面では秩序破壊の混沌(カオス)を生むマイナスをとまないつつ、反面、党独裁の強固な権力ヒエラルヒーに対する民衆の異議申し立てを正当化する「民主」の基盤を、社会主義体制下の中国に初めて生み出したということ。第二に、それゆえに一九七六年四月五日に起きた第一次天安門事件と一九七八年秋から七九年春にかけて起きた「西単の壁」「北京の春」の民主化運動は、いずれも文革の洗礼を受けた元紅衛兵を主体とした中華人民共和国史上初めての市民の自発性に基づく本格的民主化運動となったこと。この二点から文革は中国社会主義の政治民主化にとって、決して無益なものではなかったという点を仮説として提起したのである。】『歴史のなかの中国文化大革命』岩波現代文庫pp.8-9

この見方、考え方には私は反対である。天安門事件以降現在にいたる民主化運動は、反文革であり、反社会主義ではないのか。思想的リーダーである「元紅衛兵」の思想は新自由主義であり、欧米式「近代化」の道をもろ連型「社会主義」の道をも否定しようとした文化大革命の理念はそこにはない。中国の現在の現実が事実をもって証明しているとおりである。

全面否定や権力闘争アプローチと闘おうとした文革研究の動機と志において積極的だった加々美さんが、どうして対極的な見方、考え方になったのだろうか。繰り返し繰り返し彼の研究を読み返した私は、「加々美さんの変質」について、ひとつの以下の仮説として考えるにいたった。

加々美さんは出身血統主義を批判した遇羅克の思想と闘いを掘り起こしながらも、出身血統主義を特殊中国的な事情に起因するとしたのである。すなわち、[木へんに當]案材料(個々人にちて出身階級や階級区分などを記した身上調査)制度の問題を指摘した。私は、反権力運動におけるくむほんの権

原)をめぐる出世主義や競争心の問題として、中国のみならず日本の反権力運動が抱えている問題と共通のものとして、これを批判しなければならないという立場なのである。

文化大革命を特殊中国的な事件としてみるかぎり、それらは結局、アジア的「野蛮」や東洋的「専制」を指摘する、さまざまなオリエンタリズムに帰着する。何のことはない、ファノンが批判した「黒い白人」ならぬ「黄色い白人」の思想であり、中国やアジアに対する蔑視以外の何ものでもない。

【これについては、当時私は、「ひどいわ、ひどいわ主義」批判として、数年にわたって、闘争－批判をやろうとした。

●「団結の哲学をうちたてよう」「ひどいわ、ひどいわ」主義に反対する」

<http://www.linelabo.com/hidoiwa.htm>

●「団結の哲学をうちたてよう 続・「ひどいわ、ひどいわ」主義に反対する」

<http://www.linelabo.com/hidoiwa2.htm>

40年をへた現在も、中国における「出身階級決定論」と通じるものとして日本の「ひどいわ、ひどいわ主義」は、依然として、闘争－批判－改革の対象である。】滴水洞002

編集



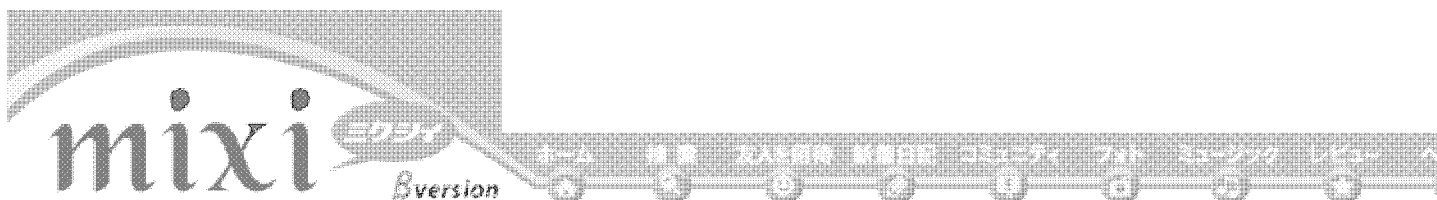
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年09月19 滴水洞 016◆「わかりやすい説明」という陥穽

日
08:12

< 9月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

- 一覧を見る

過去の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

ちょっと前、『群像』2006年9月号で、大澤真幸さんが保坂和志さんとの「自由」の盲点」という対談[同誌pp.162-180]で、文化大革命を総括するうえでも、とても面白い発言をしているので、少し長くなるが、学習ノートとして引用しておきたい。

【……ある衝撃的な出来事が起きると、たいてい、すぐに、それに対して、わかりやすい説明が、マスコミや評論家を通じて与えられ、流通します。学生なども、すぐにそういう流通している説明に影響されて、自分のレポートや論文に引用します。でも、わかりやすく、誰もがすぐに納得してしまうような説明は、九十九パーセント間違っています。その出来事に最初に出くわしたときの衝撃を思い起こしてみれば、このことはすぐにわかります。そんな、どこにでも流通している説明や図式に回収できないからこそ、そもそも、衝撃を受けたわけです。でも、衝撃を受け、不安を感じている人は、自分の身の丈にあった、わかりやすい説明をまわって、それに飛びつこうとするわけです。そういう説明で、衝撃や不安を解消しているだけです。

〔中略〕

ただし、そういうときに、じゃあ当事者に話を聞けばすべてわかるんじゃないかと考えがちだと思うんですが、そこも気をつけないといけません。当事者であってもわかっていないところがあるんです。もっといえば、当事者自身もわかりやすい図式や流通している凡庸な説明に汚染されていることがある。当事者としても、聞かれれば説明せざるを得ないから、わかりやすく説明しちゃう。だから聞き方が重要です。

〔中略〕

本人は恐らく、自分自身がいつに違和感を持ち続けている可能性があって、その違和感をどれだけ保つかということがすごく大事だと本当は思うんです。その違和感にどれだけ忠実になり切れるか。そこにみんな耐えられなくなる。どこかで違和感に妥協しちゃって、なかったことにしちゃう。

僕が今大学の学部のゼミで、こういうのをやっているんです。まず、自分の興味のある社会的な問題を何でもよいから選びます。「クローン人間は許されるか」とか「安楽死は是か非か」とか、何でもかまいません。それについて、調べてきて、重要なことは、必ず、自分なりの結論を出させるんです。学生はすぐ両論併記みたいな形で終わらせようとするから、それだけではだめで、私はこうだということまでいわせる。そのときに、微妙な問題がある。それは、どこまで違和感に耐えられるか、どこまで違和感を持続させることができるか、ということです。つまり、違和感に妥協しない結論を出せるかが、鍵なんです。

例えば従軍慰安婦問題を取り上げたとします。おそらく、戦後生まれの今の学生にとっては、どちらの結論も、つまり右的な結論も、左的な結論も、どちらにも違和感を覚えるというのがほんとうではないでしょうか。そのとき、違和感をすぐに打ち捨てて、どちらかの結論に飛びついてはいけません。その違和感を、我慢してキープしながら、それを噛み殺さないような結論を何とか模索する。それが大事です。

ちょっと話が迂回しましたがけれど、どうしてもなく解消できない微妙な部分みたいなものにどれだけ忠実に文章を書けるかということです。私のことしか書いて

いない文章が、それでも人に訴えるものがあるのか、それとも、その辺はもう自分で処理してくれと突き放さざるを得なくなるか、そういうことが分かれ目になってく
と思うところです。】pp.172-173

[編集](#)



コメント

[コメントを書く](#)

音治郎

2006年09月19

日

14:33



「マスコミや評論家のわかりやすい説明」は
自分の知らなかった経過や状況はそれによってわかっても、本質と行動の方向
は明らかにされませんね。

階級的観点と権力問題ぬきの議論は泥沼に陥ります。

「死刑廃止」の論議も同じでしょう。
「人が人を裁いてはいけない…」なんていうのも
形而上学のさいたるものですから。

紅衛兵

2006年09月19

日

16:42



音治郎さん、こんにちは。

そうですね。「文革の当初の理念はよかったけれど暴力的側面はよくない」など
という「わかりやすい」評論を垂れ流す莫迦がいまだに少なくないのも困ったこと
です！

削除



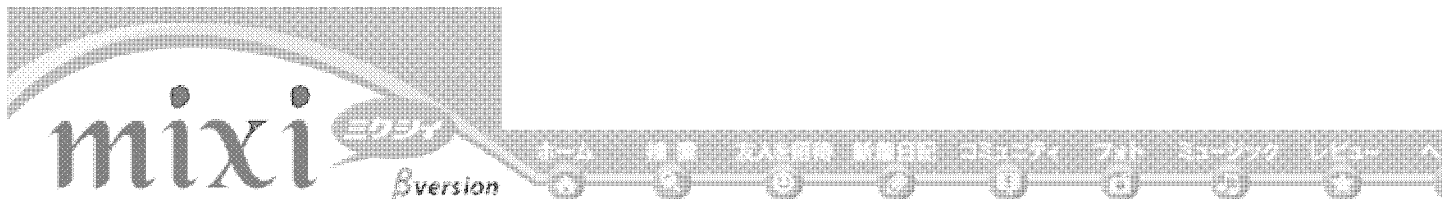
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件(5)件

2006年10月01 滴水洞 017◆続々・むほんの権原はどこにあるのか

日
18:37

< 10月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

- 一覧を見る

過去の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

「紅五類」とは、労働者出身者、貧農・下層中農出身者、革命幹部出身者、革命軍人出身者、革命烈士出身者——のことである。これが血統主義といわれた理由は、この規定が親子兄弟など血縁で影響し、本人の進学や就職をも左右したからである。

1966年8月、譚立夫と劉京は「親が英雄なら子供は好人物、親が反動なら子供は大馬鹿者、基本はかくのごとし」との大字報を貼りだし、全国的な論争を引き起こした。

革命幹部、革命軍人、革命烈士遺族はいわば論功行賞の規定である。《むほんの権原》として主張するとすれば、革命活動家の血縁者だから革命をやる権原があるという同義反復に陥る可能性がある。制度的に何らかの物質的恩恵が得られるとしたら、それは新たな特権階級を生む基盤となりかねない。実際に、に党が変質し、社会が変色してしまった現在の中国の「太子党」が事実をもって証明しているとおりである。

労働者、貧農・下層中農は階級規定ではあるが、親が革命の側だからといって子が革命の側とは限らない。生まれながらの革命家など存在し得ないからである。

「紅五類」規定は、日常的に非「紅五類」の人びとに対する一種の差別用語として用いられ、それだけではなく、トウ[木へんに當]案材料とよばれる身分調書に載せられ、公安組織に保管され、冒頭述べたように本人の進学や就職をも左右したわけである。

また、中国の知識を得ても日本の現実を変革する力に結びつけ得ない莫迦には、見当もつかぬことかもしれないが、日本の左翼運動のなかでも「紅五類」ならぬ「差別され抑圧された人びと」という規定が猛威をふるい、この苦しみはお前らにはわかるまい、という脅し(逆差別)として用いられたことは記憶に新しい。まさに、血統主義は、日本と中国の文化大革命が共通して克服しなければならぬ問題であった/である。

「階級闘争、一部の階級が勝利し、一部の階級が消滅する。これが歴史であり、これが数千年にわたる文明史である」との毛主席の指摘は、やはり正しい。歴史的事実として、いまも証明されつづけているとおりだからである。しかしながら、これまで論じられてきた多くは、「階級」についてであったのではない。いわく、革命の指導階級は誰か、階級とは何か、プロレタリアートとは何か、といったあんばいである。左翼の凋落著しい最近では、マルチチュードとか、プレカリアートとか、言い換えてみているが虚しい試みである(もちろん、不正規労働者などという役所用語を使って「正規」があるべき姿とする思潮を支えるよりは、そうした試みは試してみるに値すると思う)。

なぜなら、革命(むほん)をやる階級は、あるがままの社会集団ではありえず、目的意識を導きにくくなる)集団でしかありえないからである。

「階級闘争」の生命力をふりかえって考えなおそう、とするなら「階級」とは何かを考えること以上に、「闘争」とは何か、むほんとは何か、造反とは何か、に検討の比重を少しばかりずらすのがよい、と私は考えている。

滴水洞 003◆むほんの権原はどこにあるのか

http://mixi.jp/view_diary.pl?id=189084238&owner_id=2578600

滴水洞 010◆続・むほんの権原はどこにあるのか

http://mixi.jp/view_diary.pl?id=202360284&owner_id=2578600

編集

コメント

[コメントを書く](#)

2006年10月01

日

23:53

☐[Harpo](#)

だから永続革命なんでしょうけどねぇ。。

[紅衛兵](#)

Harpoさん

コメント多謝、御意。

理論的には、連続革命論と革命発展段階論……。

2006年10月02

日

00:44

☐

それ以前に心情的に、こうも革命の変質変色を目の当たりにさせられると、悔しいですね。

この連載のはじめのほうで紹介したBSドキュメンタリーで、王国祥さんは文化大革命について「七億もの人民が参加した大運動なので、この歴史は決して忘れ去られべきではありません。われわれはあの時代をくりぬけてきたのです。あの生きた人びと全部が否定されるとしたらおかしい話です」と語っているが、強く共感します。

[Harpo](#)

プロレタリア階級独裁下における継続革命、「紅と専の統一」ですか。。。政治力学のグラデーションの中で、「倫理主義」の罠に陥らず(連赤の総括は、畢竟、この点に尽きるって思うのですが、事件が公安の手で計画的に暴露された当初、『情況』の対談か何かで、さらぎさんが「銃撃戦は正しいが、肅清は誤り」なんて言ってるのを読み、問題の本質が何も捉えられてないなあと思ったことを記憶しています)、このような理論のアイデンティティを、党なり、階級なり、ある水準の集団単位(大変乱暴なまとめ方で恐縮ですが)で、具体的な政治行為として持続していくことは、たいへんに困難なことです。私も、私の属していた集団も、そこで解体されちゃったのだと思っています。

[紅衛兵](#)

Harpoさん、御意。

「銃撃戦は正しいが肅清は誤り」などという意見(当時の大半でした/おそらく今も同様)は、思想的頹廢の極みです。毛主席は「誤りをおかさない人間は何もしない人間である」と言っています。反権力の志をとす立場からは「リンチ事件」の魂をこそ支持すべきでした、「世間」のバッシングに抗して。

2006年10月02

日

10:15

☐

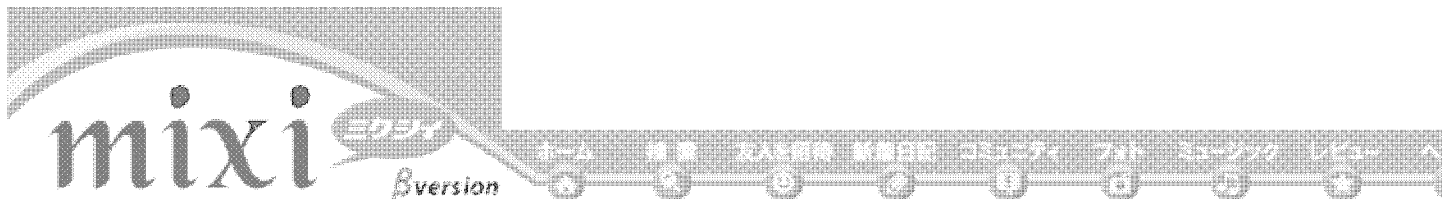
同様に、「文革の理想はいいけど暴力はよくない」などという「安全圏からのご高説」が絶えぬ現状は腹立たしいかぎりです！

同様に、全共闘運動当時に暴力革命を称揚し、最近になって「非暴力」を強調する輩を見ると、眉に唾をつけてふふんと笑わずにはおれません。

削除

コメントを書く

COMMENT

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年10月05 滴水洞 018◆「熱狂」という自覚的能動性の発揚こそが歴史をつくってきた

日
09:37

< 10月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- 一覧を見る

各月の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

私は文化大革命は権力闘争で紅衛兵ら青年たちはそれに利用されたのだ、という見方、考え方には反対である。文革中も文革後も、そして今も、その立場である。第一そのような見方は私には馴染まない。それは「大東亜戦争で特攻隊として死んでいった青年たちは軍国主義に利用されたのだ」と教え続けた戦後左翼に対する不信の念と通じる。“騙された、バカで哀れな奴ら”という視線、そこに権力的な、啓蒙主義の思い上がりを見るからである。

人は騙されることもあるだろうが、一時的、部分的でしかない。日々働き、食って寝る、そういう日常をおくっている人間が身体をはって生命を賭すということには、時代と社会のなかでの何らかの自発性、自覚的能動性があるのである。権力争いが存在することを否定しようというのではなく、意見の対立の背後に必ず存在するはずの、対立の根拠となった社会的な事実と争点、これをとらえ、みていかなければ、歴史をつくっていく力は見いだせない、また死んでいった人たちの犠牲はうかばれない、と思う。

ここで考えなおしてみたいと思うのは、大躍進のことである。文化大革命に好意的な人びとでも、大躍進となるとほとんど否定的である。大躍進は1950年代末に行なわれた農工業の大増産政策であり、大失敗に終わった、というのが定説とされて久しい。

しかし、1944年技師として中国に渡り、以来35年、北京で人びとと苦楽を共にしてきた山本市朗さんの『北京三十五年』岩波新書1980、に次のようなとても興味深い記述がある。

【北京が下から盛り上がった「働け」「働け」の熱気にうかされて、無我夢中になって働いた時期であった。業種を問わず、地位を問わず、この時期ほどあらゆる部門の従業員の作業意欲の高揚した時期を、それ以前においても、それ以後においても、私は見たことがなかった。】下p.54

そう、人びとの自覚的能動性をひき出し得た運動だったのではないか。大躍進の力、文化大革命の力、これを私は考えなおしてみたいのである。「無我夢中になって働」けるというのはすばらしいことである。うらやましいことである。

〈翻身〉への糧でもあり、自らを表現するものとしての労働(下放)を、ふたたび「苦役」に、それどころか「懲罰」に、逆戻してしまったものは何なのか。誰なのか。

倦怠感のなかで、ただ日常を過ごしている、ひとりひとりが砂漠のように寂寥としたなかでばらばらに死んだように生きる、そのような社会が幸せであろうか。人びとが熱狂——ときにそれは「暴力的」なまでの昂揚を示す——のなかで、ひとりでは実現できない類的な生命力を発揮する時代と社会を私は望ましいものと思っている。

編集

コメント

[コメントを書く](#)

Harpo

紅衛兵様

「私は文化大革命は権力闘争で紅衛兵ら青年たちはそれに利用されたのだ、という見方、考え方には反対である。文革中も文革後も、そして今も、その立場である。第一そのような見方は私には馴染まない。それは『大東亜戦争で特攻隊として死んでいった青年たちは軍国主義に利用されたのだ』と教え続けた戦後左翼に対する不信の念と通じる。“騙された、バカで哀れな奴ら”という視線、そこに権力的な、啓蒙主義の思い上がりを見るからである。」

然りです。人間の実存を賭けた行為を抽象的・形式的な政治論議の「高み」から図式的に裁断し、機械的にレッテルを貼って非難したり、指導したりしてみせる手口。その思い上がりと胡散臭さにボクたちは何度ウンザリさせられたことでしょう。反天皇制を唱えながら、ウラ天皇制そのままにピラミッド型ヒエラルキーの下、戦前・戦後一貫して人民の純情を支配し続けてきた代々木型ビューロクラシーのみならず、新左翼政治も、そのような事大主義的な思考と行動から自由だった、とは必ずしも言い切れない、そのような気がしています。

「人は騙されることもあるだろうが、一時的、部分的でしかない。日々働き、食って寝る、そういう日常をおくっている人間が身体をはって生命を賭すということには、時代と社会のなかでの何らかの自発性、自覚的能動性があるのである。」

2006年10月05
日
13:58
☐

然り。いつの世も、このような瑞々しい感性こそが、階級深部での革命精神を支えているのだと思いたい。心の底から、そのように思いたいのですが、いつも力及ばず、事大主義や政治力学主義に出し抜かれてばかりでした。

更に言えば、私は、反スタ的な「裏切り史観」や、かつての山川暁夫や高野孟（津村喬の兄）、金子勝ら代々木から切り捨てられた新日和見主義グループの「謀略史観」に与するものではありません。それらの客観主義に、反主流エリートを自認する者の慇懃無礼で嫌味な「優越意識」を感じるからです。

山本市朗さんの『北京三十五年』岩波新書1980

私も、面白く読ませていただいた憶えがあります。同じ頃、中岡哲朗の『私の『毛沢東思想万歳』』も併せて読みました。当時、日電の零細下請け工場に勤めていたせいか、テラー・フォードシステム以降の労働過程論の具体的な再構成が必要、との問題意識があったものですから。

その時、もしかすると「大躍進」の生産運動としての失敗は、「土法」をスローガンとしつつも、19世紀的生産力主義思想に導かれ、大工業至上主義的な労働編成と生産方法、つまり「洋法」的手法でもって「土法」をやろうとした失敗じゃなかったのか。。。そのようなことを仮説として思い抱いたことを記憶しています。しかし、この仮説をどうやって検証すれば良いのかわからず、そのまま仮説の立ち腐れになってしまいました。。。

返す返すも、浅学非才の己が身に、口惜しいやら、恥ずかしいやらの日々を送ってきました。身辺の状況が変化した今でも、そのような心持ちには、大した変化はないような気がします。嗚呼やんぬるかな、わが恥多き人生よ、です。。。

HARPO拝

紅衛兵

Harpoさま

熱いコメントありがとうございます。

自分自身の中から響いてくるようなコメントを読みながらとても不思議な感じに襲われています。

2006年10月06
日
08:03
☐

文化大革命、ベトナム戦争、全共闘運動……

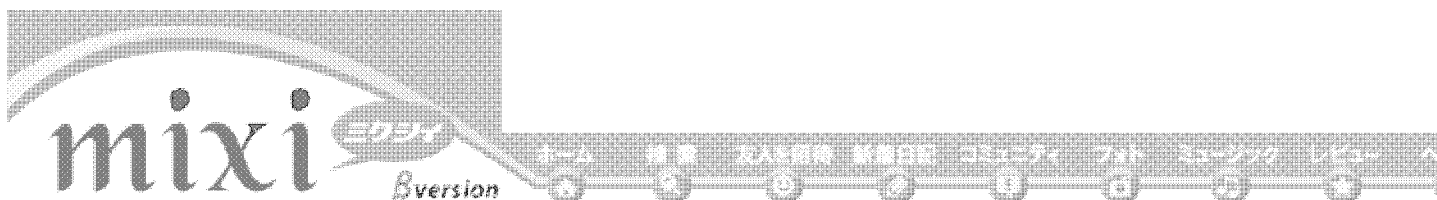
私も中岡哲郎さんの仕事に触発されて、自身を「単調な反復労働」の現場におきながら技術と人間について考え続けています。30年前は土木建築荷役金属の日雇い、現在は校正編集組版の派遣パート、として。よろしければ、以下、ご批判いただければ嬉しく思います。

<http://www.linelabo.com/chie0011.htm>

<http://www.linelabo.com/wdtp0008.htm>

<http://www.linelabo.com/nosaka0512.htm>

削除

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年10月08 滴水洞 019◆意志としての造反(むほん)再論

日
12:41

< 10月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

最近の日記

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

- 一覧を見る

過去の日記

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧

滴水洞017で私は【「階級闘争」の生命力をふりかえって考えなおそう、とするなら「階級」とは何かを考えると以上に、「闘争」とは何か、むほんとは何か、造反とは何か、に検討の比重を少しばかりずらすのがよい】と述べたが、いま読んで『フーコー・コレクション 5』(ちくま学芸文庫2006年9月)で、わが意を得たりという記述に出会った(「世界認識の方法 マルクス主義をどう始末するか(吉本隆明との対談)」同書pp.64-115)。

ミシェル・フーコーは【人間のさまざまな行動と意志との関係を語るにあたって西欧は、いままで二つの方法しか持ってはいませんでした。つまり方法においても、概念においても、あの伝統的な自然-力という形か、それから法-善悪という形でしか問題が提起されていなかったわけですが、奇妙なことに、意志を思考するにあたって、人はこれまで軍事的な戦略にその方法を借りることはなかったのです。私としては、いわゆる意志の問題を闘争といいますが、あるいはさまざまな抗争関係が展開されてゆく場合の、その葛藤を分析する戦略的観点といった形で提起され得るのではないかと考えています。】p.82という立場から次のように述べている。

【…マルクスが確かにそう口にしていながら、今日ではほとんど死語としてしか通用していない言葉があります。それは、階級闘争という言葉であるわけですが、おそらく、いま申しあげたような視点に立った場合、この言葉を改めて考えなおすことが可能となりはしまいか。たとえば、歴史の原動力は階級闘争にあると確かにマルクスはいっているし、また、その後、多くの人がその言葉を繰り返しています。なるほどそれは間違いのない事実であり、そこで社会学者たちが、いったい階級とは何か、いかなる人がその階級に属するかといった議論をあきるほど蒸し返してもいます。しかしこれまで、誰ひとりとして、闘争とは何かを検討したり究明したりした者はなかったのです。階級闘争というときのその闘争とはいったい何か。闘争というからには、それは抗争であり戦争であるわけですが、その戦いはどんな具合に展開され、何を目標として、何を手段として演じられるのか。いかなる合理的資格にもとづいての戦いなのか。私が、マルクスを起点として論じたいことがらは、階級の社会学といった問題ではなく、闘争をめぐる戦略的方法にあるのです。それが、マルクスに対して示す私の関心であり、そこから問題を提起してみたいと思っている点なのです。

で、闘争は、私のまわりのいたるところにさまざまな運動として生起し、展開されています。たとえば成田の問題、それから吉本さんが一九六〇年に日米安全保障条約をめぐる、国会前の広場で行なわれた闘争、フランスにも闘争があるし、イタリアにも闘争がある。そうした闘争は、それが戦いである限りにおいて、私の思考の視野に入ってきます。たとえば共産党は、この闘争という問題を考える場合に、闘争それ自体ではなく、一体あなたは、どのような階級に属しているのか、あなたは、プロレタリア階級を代表しつつ、この闘争を行なっているのかといった問いしか発しようとしておらず、闘争とは何かという、その戦略的側面のほうは、一向に問題になってこない。私にとっての関心は、むしろ抗争関係そのものの事件性です。一体だれが、何と、どのような手段で闘争に入っているのか、またなぜ闘争があり、その闘争は何を基盤としているかという点にあります。】pp.84-85

フーコーがここで吉本さんと話している意志の問題とはとりもなおさず毛沢東思想の核心のひとつである自覚的能動性の問題である。

「あるがままの階級」として革命勢力に入れようがない、貧農や任侠(文字を奪

われ、生涯結婚できず、葬式も出してもらえない流れ者)を、三大規律八項注意の歌で「なる階級」へと階級形成していった——それが毛沢東の中国革命であった。事実で証明されているとおり、この人民解放軍の規律と道徳的権威の力は文革の内ゲバを解決する大きな力になった。

これと対照的に、日本の新旧左翼が規定する革命勢力は文字が読めるだけでなく、『共産党宣言』『賃労働と資本』をはじめとする初級から順を追って学習するさまざまな文献を読んでいる者という規定である。事実が証明するとおり、この日本の左翼はほとんど死滅した。

革命運動において理論が持つ決定的意義をみとめるからこそ、その理論はどのようにして物質の力となるのか、その道すじがなければ理論は“絵に描いた餅”に終わる。反ナショナリズムを主張しながらも民権がそのまま国権に転じていくという、日本の反権力運動の歴史(明治維新以降、死屍累々。反ナショナリズムをいいながら「東北アジア共同の家」などという国権の主張と同衾させて恥じることのないカンサンジュン(姜尚中)しかり!)を止揚しなければならない。

編集

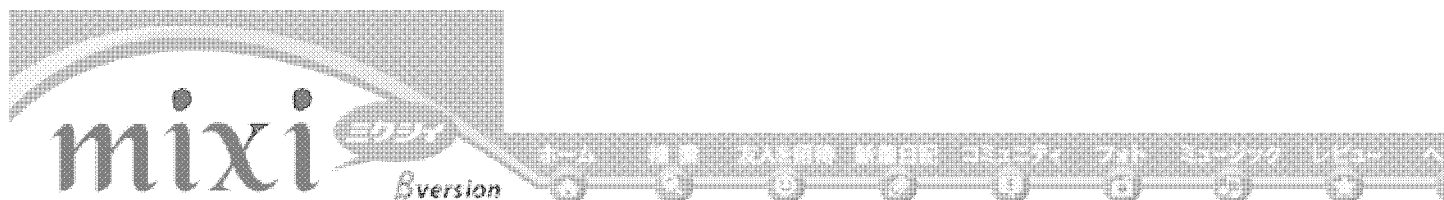
コメントを書く

COMMENT

確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.

[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全件に公開

2006年10月10 滴水洞 020◆「労働」をめぐる二つの路線の闘争

日
11:09

労働者農民が主人公である、とはどういうことだろうか。労働者農民が主人公である社会かどうか、はどのようにして判定できるのだろうか。

労働者農民が主人公という社会が実現していたら、労働者農民が尊敬され、労働者農民が社会で幅をきかせ、労働者農民の労働が尊敬されているはずである。少なくとも、「労働改造」と称して労働をいわば懲罰にはしない。はずである。悪い奴に罰として、敬意の対象である労働を与えていては、労働は尊敬されない。労働者農民は尊敬されない。

映画『夜明けの国』、半農半読学校でブタを飼育する場面がある。「われわれの搾った牛乳や、取り入れた穀物が、中国の人民に、ひいては世界の人民に奉仕すると思うととても愉快だ、と一人の生徒は言った。」このナレーションはとてもカッコいいと私は思う。

「満州国」皇帝であった愛新覚羅・溥儀の自伝『わが半生』にこんなくだりがある。

【…多くの人たちが、労働をあやまって神が人類に与えた懲罰だとみなしているのに、共産党員だけが、労働を正しく人類自身の権利だとみなしている】大安 1965下p.215

『労働兵と結びつく道をあゆむ』外文出版社1970に収められている呉小明「永遠に貧苦牧民のよき継承者になりたい」にはこんなくだりがある。

【…学習をつづじてわたしは、貧苦牧民のなかで生活していながら、自分を牧民の上においていることに気がつきました。つまり苦しい仕事や疲れる仕事、きかない仕事は牧民がやり、自分は楽な仕事やきれいな仕事をやるのがあたりまえだ、という考えがあったのです。これでは、毛主席が教えているように、思想感情の面から勤労人民ととけあうことができませんか。また勤労人民が自分を身内のように見てくれることができませんか。】

こうした労働観をく「下放」路線の労働観と呼んでおく。私自身、この立場観点をソ連型社会主義とはちがってとても新鮮なものとして受けとめた。それゆえ学校をやめ、3Kの肉体労働の現場に「下放」したわけである。

シモーン・ヴェイユの戦争と革命についての考察には惹かれながらもその労働観には強い違和感を感じる。『工場日記』を読むと、ひたすら痛い。

【第六週 10日……気分がすぐれなかったが、仕事をつづけた、——はやいスピードで。がんばった。しかも、しばらくたつと、一種の機械的な幸福感をおぼえた。これはむしろ墮落のしるしであろう……】

単調な反復労働のもたらす「機械的な幸福感」が、なぜ、どうして「墮落」なのか。

彼女は、歴史をつくるのは単調な反復労働の営々とした蓄積であること、社会をつくるのが単調な反復労働を担う人びとであることを理解していない。

他方で、精神労働は肉体労働より下位であり、労働は罰だと信じている観念に縛られている。おそらくそれゆえに、感性的認識である「機械的な幸福感」から理性的認識へと深めることを拒み、「墮落」と断じてしまっているのだろう。

典型的なインテリの自己憐憫である。

< 10月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

最近の日記

滴水洞 023◆中国革命の原点、

百度(Baidu)、来年から日本語

滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶

滴水洞 番外02◆江尻健二さんの

滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想

北京からの報告(2)

北京からの報告(1)

もっと読む

最近のコメント

一覧を見る

過去の日記

2006年12月の一覧

2006年11月の一覧

2006年10月の一覧

2006年9月の一覧

2006年8月の一覧

2006年7月の一覧

2006年6月の一覧

2006年5月の一覧

2006年4月の一覧

2006年3月の一覧

2006年2月の一覧

2006年1月の一覧

単調な反復労働の心地よい疲れのあとに呑む酒はサイコーである。そして人びとは食って寝る。

[編集](#)[コメント](#)[コメントを書く](#)

姉御

2006年10月16

日
19:02
☐

マルセ・太郎の「泥に河」は良かった。比較的初期と終わりを見たがどちらも良かった。労働は生きる基本と思います。私は何時もミツバチの事を考える。あんな小さな口で生きてる限り何万回も蜜を運び、自分のためには一口も飲まず死んでいく。これ「労働」の原点ですね。あるご夫婦が軽井沢の別荘で大喧嘩をして、妻がたまたまハチミツを小ビンにあげていたら腹立ち紛れに夫がいきなりそれを取り上げて流しに捨ててしまった。彼女は「こんな小さな口でどれだけ働いたと思っているの、自分はろくに働きもしないのに許せない！一生許せない！」と怒鳴って暫く別居をした。そんな彼女を私は好きになった。いい人だと思った。私は無償で働くミツバチがいとおしい。

紅衛兵

姉御さま

コメントありがとうございました。

2006年10月18

日
18:34
☐

人びとの意識のなかにある肉体労働への蔑視を変えるということは、ヴェイユのように精神労働を卑下することではないと思います。マルクスが労働という言葉よりむしろ生産という言葉で表そうとしたもの、それは物質的財貨の生産だけでなく、人間そのものの生産(子を産むこと)、意識の生産(かんがえること。精神労働、表現行為)も含んでいたはずで。中国革命から文化大革命にいたる前進のなかで、この面では逆に、肉体的に頑健な、単身の、男による革命運動の側面が強められ、子を産む女性や知識人が軽視(逆差別！)されていた側面がなかったか。三大差別のひとつとしての肉体労働と精神労働の差別をなくすということは、ブルジョアジーとプロレタリアートとの関係のように敵対的で食うか食われるかという対立とはちがう。はずである。逆差別はそのところの取り違えの結果である。文革初期に課題として浮上した臨時工と本工との関係はその後どうなり、今はどうなっているのだろうか。

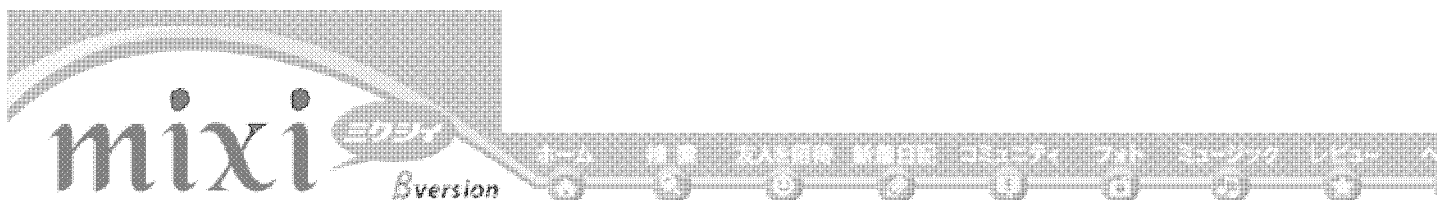
削除

[コメントを書く](#)

確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.



[トップページ](#) | [メッセージ](#) | [日記](#) | [ミュージック](#) | [おすすめレビュー](#) | [お気に入り](#) | [足あと](#) | [プロフィール](#) | [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年10月20 滴水洞 番外01◆魯迅没後70年に際して

日
00:32

こしは魯迅が死んでから70にあたる。魯迅が上海で亡くなったのは1936年10月19日である。この年は、日本の2・26事件、ヨーロッパのスペイン内乱の年でもあった。

当時、中国の文壇では抗日民族統一の闘いをめぐって激しい論争のさなかであった。魯迅はだれよりも抗日民族統一戦線の実現を望む立場であった。しかし、その志をとおそうとするがゆえに、安易な妥協による統一戦線結成には反対した。このような魯迅の態度は非政治的で大局を認識しないものとして、「左翼」の主流から非難され。攻撃された。少数派であった魯迅は、その論争の真っ只中で戦死したのである。

私が魯迅から学んだことは多い。今夏、文革（文化大革命）の総括をやろうと決心したのもまた、私なりに魯迅の精神を見習って、のことである。

1925年から29年まで魯迅は許広平とかわした手紙『両地書』のなかでこう書いている。

【進取的な国民の中では、性急さも結構だが、中国のような麻痺した場所に生まれた以上、それでは損をするあけです。どんなに犠牲をはらったところで、自分をほろぼすがせいぜい、国の状態には影響がありません。たしか以前、学校で講演したときも言ったと思いますが、この国の麻痺状態を直すには、ただ一つの方法しかない。それは「ねばり」であり、あるいは「絶えず刻む」ことです。コツコツやっていって、ともかく休まなければ、その効果は一時の「談論風発」に劣るとはいえぬでしょう。むろん、こうやっている「苦悶、苦悶（この下にあと四つと……）」に陥ることがあるが、そのときはこの「苦悶」……に反抗するまでです。これは人に、辛抱して奴隷になれと勧めているように取られるかもしれないが、じつはその逆です。満足して喜んでいる奴隷には望みはないが、もし不満を抱くならば、ボツボツ有効な事業を仕遂げることはできます。】竹内好・松枝茂夫 訳、筑摩叢書1978、p.45

最初の中国という言葉は、そのまま日本におきかえて読む。寂寞、日本のいまの寂寞そのものである。しかし、論争が生きていた時代がそう遠くない将来にかならずやってくると確信する。なぜなら魯迅のいうところの「しばらくは安全に奴隷でいられる時代」（『魯迅文集』第三巻p.149）は終わり、「奴隷になりたくてもなれない時代」（同）がそこまでやってきているからである。その嵐を準備よく迎えるために、コツコツと文革論としての「滴水洞」を書き継いでいきたい。

編集

[コメントを書く](#)

コメント

2006年10月20

日
00:38

紅衛兵

Lu Xun Home Page

<http://www.xys.org/pages/luxun.html>

ここは魯迅研究の宝庫！

2006年10月27

日
01:21[panpi](#)

< 10月のカレンダー >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

最近の日記

滴水洞 023◆中国革命の原点、

百度(Baidu)、来年から日本語

滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶

滴水洞 番外02◆江尻健二さんの

滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想

北京からの報告(2)

北京からの報告(1)

[もっと読む](#)

最近のコメント

一覧を見る

各月の日記

[2006年12月の一覧](#)[2006年11月の一覧](#)[2006年10月の一覧](#)[2006年9月の一覧](#)[2006年8月の一覧](#)[2006年7月の一覧](#)[2006年6月の一覧](#)[2006年5月の一覧](#)[2006年4月の一覧](#)[2006年3月の一覧](#)[2006年2月の一覧](#)[2006年1月の一覧](#)



魯迅の覗いてみました。すごいね。一ヶ月くらいかけて読んでみたい。

2006年10月27

紅衛兵



日
09:14

panpiさん、コメントありがとう。

先学の指摘どおり、自分自身の現状認識を映し出す魯迅は何度読み返しても刺激をうけます。文革総括のなかでも読み返しています。



削除

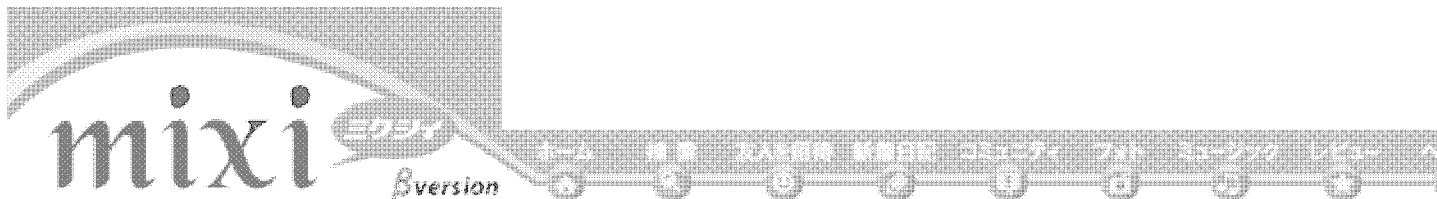
コメントを書く

COMMENT

確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.



トップページ | メッセージ | 日記 | ミュージック | おすすめレビュー | お気に入り | 足あと | プロフィール | 設

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

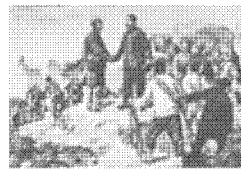
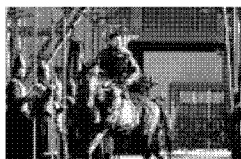
全体に公開

2006年12月18 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想

日
15:21

< 12月のカレンダー

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						



台詞する毛沢東と宋景

映画『墨攻』[写真左]が来年2月公開という。<http://www.bokkou.jp/>
(監督・脚本: ジェイコブ・チャン、出演: アンディ・ラウ、アン・ソング、ワン・チウ
エン、ファン・ビンビン、チェ・シウオン、2006中国日本香港韓国合作、配給: キュー
ービカル・エンタテインメント、松竹)

戦国時代に孔子の弟子たち(儒家)と対峙、天下の思想界を二分したのが墨家である。墨子は孔子の「仁」から出発したが、工商業者の思想、市民社会の思想として発展させられ、「天下の賤人」たる工人を教育、組織した。これは、毛沢東が、近代西欧の個人主義やアナキズム、マルクス主義から出発して「大同」を主張し、社会の最下層の遊民、外村人、工人階級を教育、組織し、強力な解放軍をつくりあげたのと酷似している。ともに「防禦」から出発する弱者のための軍事論であったことも共通である。

新島淳良氏は「イデオロギーとしての毛沢東は、前5～3世紀の墨家思想の蘇りである」と指摘したが、事実、毛沢東こそが、国内「難民」としてもっとも卑しまれ蔑まれた遊民を「兵」として訓練し、社会でもっとも尊敬される人間類型として組織し、また人民公社をつくらせて食べるようにしたのである(新島淳良『歴史のなかの毛沢東』)。

墨家は滅んでのち、その思想は「墨侠」と呼ばれる遊侠集団にうけつがれた(増淵龍夫『中国古代の社会と国家』)。その社会的基盤は最下層の遊民である。現代の中国遊民無産階級の心に、墨家の思想が生きつづけていたからこそ、かれらは毛沢東に共鳴し、宗教的にまで帰依したのである。毛沢東の死後、中国の党は変色し、社会は変質してしまった(東嶽廟では官職を得たいという神さまに人気が集集中し、北京では地下道でも法源寺の門前でも乞食が物乞いをしている)。

「打不平」=天に代わりて不義を討つことは、墨家から毛沢東へ、さらに第二、第三の中国革命—文化大革命へと受け継がれていくことはまちがいない。

編集

コメントを書く

コメント

2006年12月18

日
15:45



panpi

基礎的な教養と関心の角度が共通しているのは驚くばかりですね。
高田淳さんの『墨子』もいい本でした。柏書房の遠い昔の「塩漬け」企画のひとつに墨子ものがありました。映画の『墨攻』は酒見さんのものですか。森さんの劇画というか、あちらのほうが面白いが。

紅衛兵

panpiさん、こんにちは。

2006年12月18

日

16:03



森秀樹氏の歴史漫画(小学館文庫)は、原作・酒見賢一、脚本・久保田千太郎、作画・森秀樹です。映画の原作は直接には森氏のコミックと発表されていますね。

私自身は森氏のコミックから入り、酒見氏の小説(新潮文庫)へと進みました。

2006年12月19

日

05:07



森

『墨攻』は昔読みましたが、いまごろ映画になるのはあちらで翻譯でも出たからなのでせうか。なほ小生は孟子に竝記して誹られたうち、墨翟よりも楊朱が好みでした。楊子爲我。一毛を抜きて天下を利するも、爲さざる也。

削除

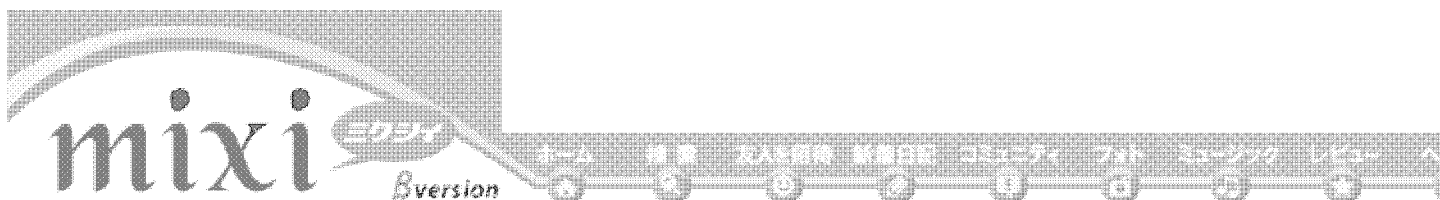
コメントを書く



確認画面

[ホーム](#) [検索](#) [友人を招待](#) [新着日記](#) [コミュニティ](#) [フォト](#) [レビュー](#) [ヘルプ](#) [ログアウト](#)
[運営会社](#) [利用規約](#) [プライバシーポリシー](#) [ご利用上の注意](#) [広告掲載](#) [スタッフ募集](#)

Copyright (C) 1999-2006 mixi, Inc.



トップページ | メッセージ | 日記 | ミュージック | おすすめレビュー | お気に入り | 足あと | プロフィール | 設

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

全体に公開

2006年12月21 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの歴史的証言

日
13:14



< 12月のカレンダー

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

日中学院元副学院長の江尻健二さんのインタビュー記事が同学院の広報誌『日中学院報』2006年12月号に掲載された(pp.1-7)。

<http://www.rizhong.org/xueyuanbao/2006-12.pdf>

江尻さんは同学院の前身・倉石中国語講習会の時期から半世紀を、中国語をつうじての日本と中国の戦闘的な友好のために闘ってこられた方である。インタビューはその歴史を要点をしぼってまとめられた歴史的な証言である。「『日中友好』との文字が書かれたヘルメットをかぶった日本人青年が、中国人留学生に襲いかかった」という善隣闘争についても当事者として証言されている。そこに貫かれているのは「日中学院の使命がなんなのか。学院の建学の精神は、中国に対する侵略を反省する中から、生まれた講座だったわけですから、その精神を失わないように、学院としての方向性を持つことが必要だと思います」との戦闘的な友好をめざす精神である。私たちはいま、改めて日本と中国の交流史を支えた闘いの歴史を語り継ぎ、その精神を引き継いでいかなければと思う。

編集

- 滴水洞 023◆中国革命の原点、
- 百度(Baidu)、来年から日本語
- 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶
- 滴水洞 番外02◆江尻健二さんの
- 滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想
- 北京からの報告(2)
- 北京からの報告(1)

もっと読む

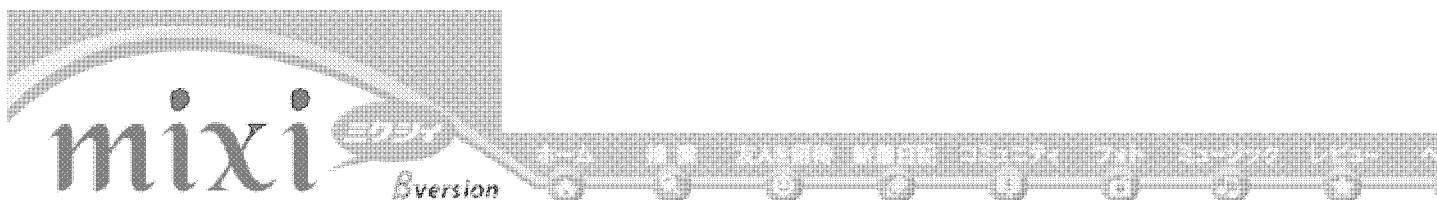
一覧を見る

コメントを書く

- 2006年12月の一覧
- 2006年11月の一覧
- 2006年10月の一覧
- 2006年9月の一覧
- 2006年8月の一覧
- 2006年7月の一覧
- 2006年6月の一覧
- 2006年5月の一覧
- 2006年4月の一覧
- 2006年3月の一覧
- 2006年2月の一覧
- 2006年1月の一覧



確認画面

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年12月26 滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶対悪なのか

日
14:33

< 12月のカレンダー

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

最近の日記

- ▶ [滴水洞 023◆中国革命の原点、](#)
- ▶ [百度\(Baidu\)、来年から日本語](#)
- ▶ [滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶](#)
- ▶ [滴水洞 番外02◆江尻健二さんの](#)
- ▶ [滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想](#)
- ▶ [北京からの報告\(2\)](#)
- ▶ [北京からの報告\(1\)](#)

[もっと読む](#)

最近のコメント

- ▶ [一覧を見る](#)

今年の日記

- ▶ [2006年12月の一覧](#)
- ▶ [2006年11月の一覧](#)
- ▶ [2006年10月の一覧](#)
- ▶ [2006年9月の一覧](#)
- ▶ [2006年8月の一覧](#)
- ▶ [2006年7月の一覧](#)
- ▶ [2006年6月の一覧](#)
- ▶ [2006年5月の一覧](#)
- ▶ [2006年4月の一覧](#)
- ▶ [2006年3月の一覧](#)
- ▶ [2006年2月の一覧](#)
- ▶ [2006年1月の一覧](#)

太田昌国さんの「〈民衆の対抗暴力〉についての断章」は、全共闘運動(文化大革命にも共通する)に参加した私たち自身の多くが自覚的に行使した対抗暴力の意味をふりかえろうとする労作である(季刊『at(あつと)』6号pp.94-100、2006年12月、太田出版、掲載)。全共闘運動、文化大革命をふりかえって考えようとするなら、ぜひ読まれるよう、私はすすめたいと思う。

1960年代、第三世界解放闘争の多くは武装闘争のの道を選んでいった。【…「傍観者」にも深い苦痛がはしる。だが、どうできるというのだろう、武力をもって最初に侵略した者が誰であり、解放運動の主体はそれに対して武力をもって対抗するしかない、と知っているからには……。／当時の私(たち)の思考は、ここで止まっていたように思える。】

肯かざるをえない。そのとおりだからである。

暴力の問題を考えようとするとき、ふたつの大きな思想問題があるのではないか。ひとつは、暴力と戦争は「人間の本性」だとする考え方であり、もうひとつは、暴力と戦争が人間を狂暴なものに変えてしまうとする考え方である。

太田さんは慎重に、しかし明確に、第一の「人間の本性」論には組みしていない。賛成である。他方で、私がどうしようもなくどこかしく感じてしまうのは、第二の、暴力そのもの、戦争そのものを絶対的に悪とする見方、考え方に対するあいまいさに対してである。彼の真摯な正義感と誠実な思索には、そうそのとおりと共鳴しつつも、あまりにも、現在の「〈民衆の対抗暴力〉が有効性を失った状況」「現実によって次第に追い詰められていること」に目を奪われ、悲観しすぎてしまっていないか。それはまた敵を過大視してしまっていることに起因する見方、考え方ではないのか。

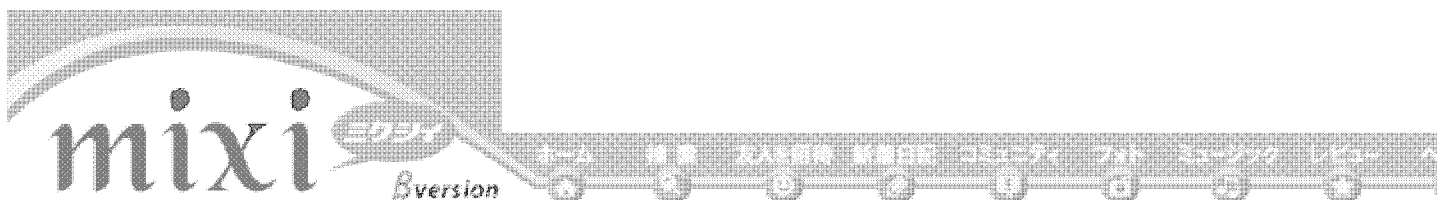
来年(2007年)は日中戦争70周年の年である。毛沢東は抗日戦争の1周年を前にした1938年5月『持久戦について』を書き、速勝論とともに亡国論にも反駁した。そのなかで

【われわれは革命戦争のなかにおかれている。革命戦争は抗毒素であって、それはたんに敵の毒素を排除するばかりでなく、自己の汚れを洗いきよめるであろう。革命的な正義の戦争というものは、その力がきわめて大きく、多くの事物を改造することができるか、または事物を改造する道をきりひらくのである。】(『毛沢東軍事論文選』p.284、1969年、外文出版社)

と指摘している。そう、全共闘運動の、そして文化大革命のなかの〈暴力〉は人々の魂にふれ、いかに生きいかに死ぬべきかを考えるようになった多くの人々を生み出したのである。全共闘運動の、そして文化大革命のなかの〈暴力〉は人々を崇高にもし、醜悪にもした。これが歴史的事実であり、少なくとも、暴力が絶対的悪であるかの見方、考え方には、私は組みすることはできないのである。

編集

[コメントを書く](#)

[トップページ](#) [メッセージ](#) [日記](#) [ミュージック](#) [おすすめレビュー](#) [お気に入り](#) [足あと](#) [プロフィール](#) [設](#)

日記の管理状況

2.4MB/100.0MB

紅衛兵の日記

[全体に公開](#)

2006年12月29 滴水洞 023◆中国革命の原点、中国共産党の創立精神

日
04:14

毛主席は折にふれて「農村作風」を強調した。その内容は次のようなものであった。

「軍隊のなかで、封建主義を一掃し、なぐったりどなりつけたりする制度を廃止し、自覚的規律をうちたて、苦楽をともにする生活をしていた」

「戦闘が終わるごとに、指揮員と兵士たちは戦闘におけるかれらの行動の成功と失敗について、すわったまま率直な討論を交した。……兵隊たちは自由に上官の誤りや愚かな行動を批判することが許されていた」

「その苦しさは誰もおなじで、軍長から炊事兵にいたるまで、主食以外は一律に五分(フェン)ぶんの食事しかとっていない。こづかい銭を支給するにも二角(チャオ)なら一律に二角にし、四角なら一律に四角にしている」

「軍隊は経済的には自給していて、だれにも負担をかけなかった。また給料という形式のものはなかった。士官と兵士は、それぞれ一区画の耕地をあたえられており、もし、かれが戦争に出て不在であれば、他の人たちがその土地を耕したり、世話をしてくれた。士官のための特別のクラブや病院、食堂はなかった。しかも、士官は兵士と同じ軍服を着ていた」

これは【『毛沢東選集』一、二巻およびジェローム・チェン『毛沢東』から河地重造が抜粋したもの。『毛沢東の農民革命論』一九七一年、『経済学年報』三十一集】として、新島淳良が『歴史のなかの毛沢東』(野草社、1982年)で引いているものからの孫引きである。

私(たち)がソ連式でなく中国式の社会主義に惹かれた理由のひとつが、こうした「農村作風」に裏打ちされたコミュンへの志向にあった。ここにこそ、中国革命の原点があり、中国共産党の創立精神があった。

“資本主義の道をあゆむ党内の実権派”との闘いは、全国的に政治権力を奪取する前も、奪取して後も存在したはずである。闘いは党内ではどうであり、党外ではどうだったのか。他の党派に対してはどうだったのか。中国革命の原点であり、中国共産党の創立精神であった「農村作風」はどう受け継がれ、貫かれたのか。長征の時期、抗日戦争の時期はどうだったのか。そして文化大革命の時期はどうだったのか。

九全大会(1969年)は、病をなおして人を救う立場から劉少奇らを除く大多数を団結させる大会となるはずだった……。文化大革命は、先行した農村における社会主義教育運動を都市へと拡大する性格をもっていた。すなわち、「農村作風」の都市への波及によって、「都市化」「近代化」と対峙しようとしたのである。残された課題は、ひとつは出身階級決定論への根底的批判であり、また、党外や他党派との団結の問題だった。思想の質としては、「農村作風」を導きにして、革命をいっそう大衆の事業にすることだった。

編集

< 12月のカレンダー

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

最近の日記

- ▶ [滴水洞 023◆中国革命の原点、](#)
- ▶ [百度\(Baidu\)、来年から日本語](#)
- ▶ [滴水洞 022◆暴力論7 暴力は絶](#)
- ▶ [滴水洞 番外02◆江尻健二さんの](#)
- ▶ [滴水洞 021◆墨家と毛沢東思想](#)
- ▶ [北京からの報告\(2\)](#)
- ▶ [北京からの報告\(1\)](#)

◆ もっと読む

最近のコメント

- ▶ [一覧を見る](#)

今年の日記

- ▶ [2006年12月の一覧](#)
- ▶ [2006年11月の一覧](#)
- ▶ [2006年10月の一覧](#)
- ▶ [2006年9月の一覧](#)
- ▶ [2006年8月の一覧](#)
- ▶ [2006年7月の一覧](#)
- ▶ [2006年6月の一覧](#)
- ▶ [2006年5月の一覧](#)
- ▶ [2006年4月の一覧](#)
- ▶ [2006年3月の一覧](#)
- ▶ [2006年2月の一覧](#)
- ▶ [2006年1月の一覧](#)

コメントを書く

COMMENT